

＊特集

## 本を生みだす力

本を生みだす力は、何処にあるのか？ 佐藤郁哉

I

## 挑発Ⅱ媒介としての編集

学術書を生みだす力を考える 橘宗吾

10

アンケート

本を生みだす際の「力」は、何だと思いますか？

青木淳一・井土純子・上村和馬・白井敬尚

中川和夫・細谷雄一・吉田敏恵

15

卓越性と威信  
エクセレンス  
プレステージ

『本を生みだす力』を読む 箕輪成男

20

学術出版を論じるアイデンティティ

『本を生みだす力』を読む 柴野京子

22

＊連載

初版本、ナンセンスなフェイシズム

平野威馬雄著『銀座の詩情1・2』 酒井道夫 表2

大学出版部ニュース

25

JAPA  
UNIVE  
PRES

NO.  
2011  
AUT

NO. 88  
2011.11  
＊秋



一般社団法人  
大学出版部協会

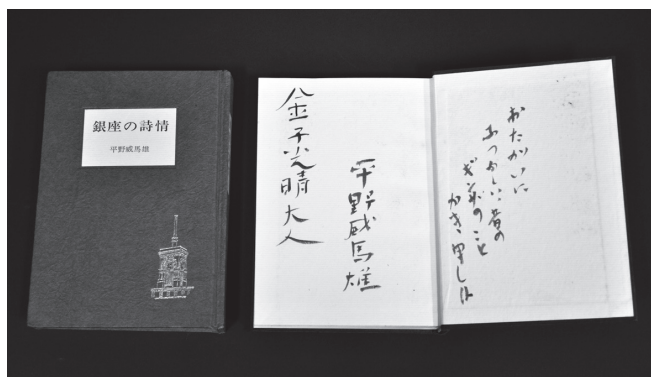
THE  
ASSOCIATION  
OF  
JAPANESE  
UNIVERSITY  
PRESSES

大学と社会を結ぶ  
知のネットワーク  
大学出版

平野威馬雄著

# 『銀座の詩情 1・2』

酒井道夫（二代目酒井九右衛門）



1巻は紺色、2巻は緑色の和紙風揉み紙に銀の箔押し。石黒敬七(1巻)と城昌幸(2巻)が序文を寄せている。両巻を通して、古今の銀座の風俗を伝える写真や図版を多数掲載。写真は臼井喜之介、臼井浩義と著者、挿画は神保朋世、著者の息子さと史、木村莊八、前川千帆によると1巻の巻末に記されている。

折りにふれ立ち寄っていた古書店の入口付近。山歩き、食道楽、民俗誌、様々なエッセイ集、紀行などが雑然と並ぶ棚に吸い寄せられる。ここに時に「あれっ」と思うような本が挟まっているからだ。無論安いに決まっている。「どうしようかな?」と迷ってやり過ぎすと、大抵は次に来たら無くなっている。どうも同じような嗜好で棚を漁っているライバルがいるらしい。

この棚からは結構掘り出し物を当てているが、本書(白川書院一九六六)は初見では買わなかった。ちよつと見、装丁のたたずまいが納得できなくて、すぐには手が出せなかったのだ。外箱の貼り題箋が半分モグっているのは古書だから許すとして、角背表紙の芯がやけに厚くて重い甲冑を佩びた感じだ。そのくせ妙に凝っていて、和紙風の揉み紙で装い、背と平には貼り題箋。ガス街路灯(1巻)と服部の時計(2巻)を平に箔押しであしらう厚化粧。本文用紙にコート紙を使っていて写真や図版の刷り上がりは良いのだが、そのためにページの開きが悪くて読み辛い。要するに、凝り過ぎていて造本バランスが悪いのだ。

再訪したらまだ人待ち顔をして居ずまいが悪そうにしていたから、仕方なく買ってやった。恩着せがましく持ち帰って仔細にチェックすると、これが献呈本だった。見返しに「おたがいになつかしい昔のギンザのことかき申し候(1巻)」「詩がサワリになるところがミソ也 スミマセンがヨンデ下サイ 平野威馬雄 謹呈 金子光晴大人(2巻)」とある。

めつぼう面白い本だ。著者の銀座への思い入れが、目一杯ぶちまけられている。もともとは3巻本の予定だったらしいところを2巻で終わつたためか、豊富に引用された資料の出典明記が充分でない。名著に属する力作だと思うが、再刊したくてもそうとう手間がかかりそうだ。

件の古書店。後日訪れたらケータイショップに様変わりしていた。数日前までは、何食わぬ顔で商っていたのに。

■特集・本を生みだす力

## 本を生みだす力は、何処にあるのか？

佐藤郁哉（一橋大学大学院商学研究科）

### 『本を生みだす力』が生まれるまで

本というものは、誰の手によって、どのようなプロセスを経て社会に送り出されていくものなのだろうか。また、著者（研究者）・編集者・出版社の経営者などさまざまな人々は、どのような利害関心をもって本づくりに関わっているのだろうか。

右のような問いを出発点として、出版業界を対象とする調査研究をはじめたのは一九九九年の春のことであった。それからおよそ一二年の歳月を経てようやく目の目を見ることになったのが、今年の二月に刊行された『本を生みだす力——学術出版の組織アイデンティティ』（新曜社刊・芳賀学・山田真茂留と共著）である。

三人の共同研究者たちとともに出版研究をはじめた当初は、五〜六年でモノグラフを刊行することを目指していた。

しかし結果的には、その倍近くの足かけ一二年の歳月を要することになってしまった。つまり、『本を生みだす力』は、「難産」の末にようやくこの世に産み出されていた本なのである。

完成までに十年以上の歳月を要したことには、幾つかの理由がある。その中でも最も重要なものの一つとしては、さまざまな人々や組織が関わる出版というもののどの部分をどのように切り出し、またいかなる形で分析していけばよいのか、という点についてあれこれ模索していく上で、当初の予想をはるかに超える時間がかかってしまった、という点があげられる。

ここでは、そのような模索を経た上でわれわれが『本を生みだす力』において採用した基本的視点について紹介するとともに、日本における学術出版の今後のあり方について、「組織ドメイン」という概念を手がかりにして考察を

加えてみたい。

## チームワークの所産としての本

右に述べたことから明らかなように、『本を生み出す力』では、本というものを基本的に「チームワーク」の所産としてとらえ、その「チーム」のあり方について解明していくことを目指している。この、「チームワークの所産としての本」ないし「協働作業としての本づくり」という見方は、本誌の読者にとっては特に目新しいものではないだろう。実際、大学出版部における日々の業務にたずさわっている人々は、一冊の本が制作され、また読者のもとに届けられていくまでのあいだには、実にさまざまな人々が関与していることを熟知しているに違いない。

もつとも、本づくりの現場に関わる人々にとっては常識以前の事柄ではあっても、出版界とはあまり縁がない者にとっては必ずしも自明の前提であるとは限らない。事実、学術書の場合にせよ、あるいは一般書や文芸書であるにせよ、主たる本の作り手として通常認識されているのは、何と言つても、表紙や背にその「銘」が刻み込まれている作家でないし著者なのである。

言うまでもなく、本の刊行をめぐる協働プロセスについて書かれた本が、これまで皆無だったというわけではない。それどころか、本づくりにおける協働作業をテーマとして含む「本の本」が確固たる一つの出版ジャンルを形成して

いることは、比較的よく知られた事実である。しかしながら、「本の本」の中でも最も数が多いのは、名編集者や傑出した出版人の評伝ないし自伝である。また、それらの評伝・自伝において最もしばしば見いだされるテーマは、(天才的なクリエイター(作家・詩人・学者等)と並外れた「目利き」である出版人との運命的でドラマチックな出会い)というものであるように思われる。その意味では、それらの評伝や自伝は、ごく限られた範囲の人々のあいだの協働作業についての解説が中心になっている。われわれが『本を生み出す力』で目指したのは、もう少し範囲を広げ、またその協働作業のあり方を、出版社という組織における他のさまざまなプロセスとの関連で明らかにしようという試みであつた。

## 学術書のメイキングにおける「選び出す力」

これは、たとえて言うならば、本の「エンド・クレジット」の一端を明らかにし、また本に関する「メイキング篇」を提示していこうとする作業であつたと言える。

エンド・クレジットないしクロージング・クレジットというのは、映画の最終部分などで流される、その映画の制作・製作に関わった人々の名前を列挙したリストのことである。映画の場合には、エンド・クレジットを見ることによって、主要なキャストやスタッフだけでなく映画づくりに関わったさまざまな人々、団体、組織の名前を知ること

ができる。さらに映画については、本篇に加えて「メイキング篇」が公表されることも少なくない。私たちは、そのメイキング篇の映像を通して、エンド・クレジットに挙げられている人々が実際に映画製作にあたっての姿を垣間見ることができ<sup>1)</sup>る。

それと同じように、『本を生みだす力』は、学術出版に關する一種のメイキング物を意図していた。つまり、同書において、われわれは本づくりの「舞台裏」における協働作業のあり方をつぶさに描き出そうとしていたのであつた。

もつとも、映画のメイキング篇は、必ずしも製作過程の全ての局面を克明に記録・報告しようとするものではない。むしろ、本篇と同様に、それ自体がしかるべき編集を加えられた上で、映画づくりの舞台裏における協働プロセスのある部分を切り出して紹介していることの方が圧倒的に多い。同じように、『本を生みだす力』もまた、本づくりの舞台裏を特定のアングルから切り取って描きだそうと

している。特に重点を置いたのは、学術出版社が持つ「知の門衛(ゲートキーパー)」としての役割という側面である。また、その役割と密接な関連を持つ編集者および編集部が出版社という組織の中でどのように位置づけられてきたのか、という問題に焦点をあてた。言葉を換えて言えば、同書においては、それぞれの出版社が、どのような形で「選びだす力」を組織として身につけていくことになるのか、という点が中心的なテーマの一つになっていたのである。

### 人の力・組織の力・制度の力

言うまでもなく、ここで「選びだす力」というのは、単なる篩い分け(スクリーニング)のプロセスにおける出版社の力量のみを指しているわけではない。実際、すぐれた学術書が世に送り出されていくためには、豊かな可能性を持つ原稿や刊行企画を選び分けていくだけでなく、それを作品および製品として大きく育てていくための力が出版社に備わっていることが、どうしても必要になるだろう。そ

歴史家二宮宏之の  
(生きられた歴史)

二宮宏之著作集5

## 歴史家の メチエ

二宮宏之  
【編集委員】 福井憲彦  
林田伸一、工藤光一

A5判 定価9030円

笑いの中に目覚めた、  
「私」という意識

## 神をも騙す

—中世・ルネサンスの笑いと蘭笑文学—

宮下志朗

四六判 定価3570円

経済学の古典を読み直し  
現代における意味を問う

岩波セミナーブックスS13

## アダム・スミス

### 『国富論』を読む

丸山 徹

四六判 定価2730円

『行政法総論』の著者による  
テキストシリーズ

## 行政裁判法

行政法講義II

大浜啓吉

A5判 定価5040円

日本企業のミクロデータに  
基づく詳細な研究

## 現代日本企業 の国際化

—パネルデータ分析—

若杉隆平 編

A5判 定価6930円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋  
(定価は消費税5%込み)

<http://www.iwanami.co.jp/>

して当然のことながら、本を育てていく上での「組織の力」に関しては、特定の編集者個人あるいはまた編集部という特定部署の力だけでなく、営業や販売、製作や総務などの業務に関わる部署、そしてまた校正家、装丁家、ブックデザイナーなど社内外の専門家を含む、出版社総体としての力量が問われることになる。

さらに、本というものを、単なるモノとしてではなくコミュニケーションの媒体として見た場合、出版社における本づくりのプロセスは、まだ「受胎期間」の初期段階に過ぎないとさえ言える。実際、本というものは、版元から取次、取次から書店へと受け渡され、さらにそれを購<sup>あか</sup>った読者に読まれる、という一連の過程を経ることによってはじめて文化的なコミュニケーションの媒体としての生命を得ていくのだと言える。つまり、本というものをコミュニケーション・メディアないし文化的生産物として見た場合、それを生みだしていく「チーム」には、出版社・印刷所・製本所・取次・書店など出版界の関係者だけでなく、読者が主要メンバーの一人として含まれることになるのである。その意味では、本のエンド・クレジットには、読者が主役級のキャストの一人として挙げられるべきであろう。

よく知られているように、特に学術出版の場合には、読者の果たす役割というものが重要になる。というのも、専門書——特に高度な研究書——を介した学術コミュニケーションは、著者の多くが一方では他の著者の本の読者でも

あるという、比較的閉じた範囲の中で展開されることが多いからである。その意味では、すぐれた学術書というのは、本来、出版界と学術界の両方の世界を包含する、広範な「チーム」の力を結集することによってこそ生みだされていくものであると言える。そして、そのチームワークが実りあるものになるためには、それぞれの世界の住人たちが、本というものを、そしてまた本を介して展開される学術コミュニケーションというものに關して、一定の価値と信念を共有した上で協働作業をおこなっていくことが、どうしても必要となる。ここで、この、出版界と学術界のあいだで共有される共通の了解事項やそれによって形成される堅固な協力体制のことを、本を生みだしていく上での「制度の力」と呼ぶことができるだろう。

### 学術出版の危機と制度の力

もし現在、日本の学術出版が危機に瀕しているのだとしたら、それは、学術界と出版界のあいだで形成されるチームワークに何らかの形でほころびが生じ、またそれぞれの世界を支え、さらに二つの世界をつなぎ合わせてきた制度の力が衰えてきたことを意味するのも知れない。実際、『本を生みだす力』で「ファスト新書」や「教養の拡散」という言葉を使って指摘したように、いま日本では、「促成栽培」的な形で世に送り出されてしまう準学術書がふんだんに存在する一方で、すぐれた学術書に結びつくはずの

**\* 第8回配本 \***  
【宮本常一著作集別集】  
私の日本地図3

## 下北半島

宮本常一著

香月洋一郎編

原書は昭和42(1967)年刊。  
本州最北の地を生活の場  
にして暮らす人びとの姿と、  
海を通じた南北各地との交  
流の歴史。「青森県人以外  
の人間が下北半島をもっと  
も正確に記録した本」とも言  
われた書。写真265枚。結  
城登美雄解説。 ■2310円

石川真生写真集

## 日の丸を視る目

石川真生写真

日の丸の旗を使ってあなた  
自身を、日本人を、日本の  
国を表現してください——  
老若男女、生まれも職業も  
思想信条も異なる人びとが  
表現した、それぞれの〈日本〉。  
100点収録(カラー82点)

■5040円

現代世界—その思想と歴史③

## EUを考える

田中浩編

経済危機とエネルギー問  
題に直面し、いま、その真  
価が問われるEUの課題と  
展望を徹底的に論ずる。

■2520円

## イギリス革命講義

クロムウェルの共和国

トマス・ヒル・グリーン著

田中・佐野訳

■2310円

## 魂振り

琉球文化・芸術論

高良勉著

■2940円



未来社 〒112-0002

東京都文京区小石川3-7-2

tel 03-3814-5521

http://www.miraisha.co.jp/

★出版図書目録無料進呈いたします★

※価格は税込

企画がその準備段階で頓挫している例が少なくないようにも思える。他方では、せっかく著者と出版関係者との綿密な協働作業を経て生みだされた本が、売り上げないし学術界における議論あるいはその双方の点で「発育不全」に陥ってしまったという例も枚挙にいとまがない。

残念ながら、われわれは、現時点では右のような状況に対する明確な見通しあるいは処方箋と呼べるものを持ち合わせているわけではない。実際、『本を生みだす力』では、主として出版社における、編集業務を中心とするゲーティング・プロセスに焦点を絞っているために、編集部局以外の部門が果たす役割についての分析は相対的に手薄なものになっている。(調査資源の制約もあって、編集部局に関する取材も、特定の分野に関するものが中心になっている。) また、同書の後半では、「文化生産の生態系(エコロジー)」という言葉を使って、学術界と出版界が交錯する場に成立する制度の力の変容に関する分析を試みているが、その試みは緒にたばかりである。したがって、現

段階ではまだ今後さらに練りあげていくべき試案の段階に過ぎないものではあるが、以下「組織ドメイン」という概念を中心にして、今後の学術出版のあり方に関して一つの手がかりを提示してみたいと思う。

## 組織ドメインと組織アイデンティティ

組織論や経営戦略論などでしばしば用いられる組織ドメイン(organizational domain)という用語は「事業領域」とも訳され、組織を取り巻く環境の中でも、その組織が主としてやりとりする部分のことを指す場合が多い。企業について言えば、そのドメインは通常、企業活動が展開される地域、主たる顧客・市場、提供する製品やサービス、そしてまた、その製品・サービスを提供する上で用いられる中核的な技術などによって定義される。学術出版社の場合には、そのドメインとしては、主として取り扱う学問領域、刊行している出版物のタイプ、主な読者層や取引先などによって定義できる。また、それぞれの出版社は、独特の事

業領域をニッチとして確立することによって、経営組織としての生命を維持していくことが多い。

このように、ドメインは、組織にとつての既存の事業領域を指すことが多い。一方で、この用語は、組織が将来にわたって開拓し獲得しようとしている事業領域を意味する場合もあり、その場合は「戦略領域」という訳語があらわれてきた。そして、それぞれの出版社が、この戦略領域という意味での組織ドメインをどのような形で定義づけてきたかという点は、学術コミュニケーションにおける出版社の位置づけという問題について考えていく上で非常に重要な意味を持っていると考えられる。また、それぞれの出版社におけるドメイン定義の変更は、当然、組織活動のあり方の変化と密接な関連を持っているものと思われる。

実際、われわれが『本を生み出す力』で四つの学術出版社（ハーバースト社・新曜社・有斐閣・東京大学出版会）のケーススタディを通して見てきたのは、これらの出版社がその歴史の中で何度となく自社のドメイン定義に修正を加えたり、あるいはまた根本的なレベルで再定義したりしながら今日にいたっている、という事実である。そして当然のことながら、組織ドメインの修正や再定義は、組織アイデンティティすなわち「われわれは、どのような組織なのか」という、組織の存在意義に関わる問いに対する答えの修正をともしうことになる。

以上のような点を踏まえて考えれば、「学術出版の危機」

と呼ばれるものも含めて、学術出版社が現在直面している幾つかの重要な問題については、そのドメインおよび組織アイデンティティの定義ないし再定義という観点からとらえていくことが有効であるように思われる。

### 学術出版社の組織ドメイン

たとえば、目下重要な問題となっている学術情報の電子化の趨勢は、学術出版社のドメイン定義を「物理的定義」すなわち製品やサービスの物理的実体を中心とする従来の定義の仕方から「機能的定義」、つまりその製品やサービスに対して顧客が求める機能による定義へとドラスティックに変えていくことの必要性を示唆しているようにも思われる。紙の本という物理的実体を中心にして考えれば、現在多くの学術出版社のドメインは、紙媒体の本の出版ということで規定できるだろう。しかし、もし出版社が果たすべき機能を、学術コミュニケーションの媒体と「コンテンツ」の提供（およびその品質管理）としてとらえるならば、紙の本は、それらの機能を果たす上での一つの手段に過ぎないということにもなりかねない。

このように、機能的定義を中心として戦略領域としてのドメインを再定義しようという動きは、学術ジャーナルを刊行する出版社においては現実に生じていることであると思われる。同じように、本誌でも何度か紹介されてきた米国等の大学出版部および学術出版社における電子書籍に対

する取組みもまた、必然的に、戦略領域および組織アイデンティティの再定義のプロセスを含むものであろう。また、それにとりもなつて、「本」そしてまた「出版」という営みそれ自体も、従来の概念ではとらえきれない意味と機能の広がりを持つようになつてきている。

もつとも、筆者には、これまで紙の本が学術コミュニケーションの媒体として担つてきたさまざまな重要な機能を電子書籍——少なくとも現在のそのような形態の電子端末では——がほぼ同じような形で実現できるとは到底思えない。また、学術書の電子書籍への（完全な形で）置き換えを性急に進めていくことは、学術コミュニケーションそれ自体の内容や質を著しく変質させ、ひいてはその価値それ自体を損ねてしまう恐れすらあるだろう。（筆者は、同じような危惧を、現在政府や一部の出版業界あるいは電子機器メーカーによつてなし崩し的に進められようとしている、いわゆる「デジタル教科書」についても抱いている。）

組織ドメインと組織アイデンティティの戦略的再定義に向けて

右にあげた、学術書の電子化の例からも明らかのように、学術出版社のドメインの再定義は、決して学術出版社や出版界のみに関わる問題ではない。というのも、「本を介した学術コミュニケーションは、本来どのような価値を持ち、またどのような機能を果たすべきなのか」という問いは、出版社と同様に学術コミュニケーションの担い手であり、また、本を生み出す上での協働作業におけるパートナーである著者たちや読者たちに対しても突きつけられている難問だからである。そして、その著者たち・読者たちの多くが籍を置く大学をはじめとする研究・教育機関もまた、学術出版社と同じように、その組織ドメインと組織アイデンティティの再定義を迫られているという点にも留意する必要がある。

情報技術の進展や高等教育制度の変貌は、否応なしに学

## 写真集大正の記憶

学習院大学所蔵写真 12900円

学習院大学史料館編 明治天皇の大葬、第一次世界大戦参戦、裕仁親王（昭和天皇）の渡欧、関東大震災……。大正時代を写し撮った第一級資料が四七七枚の貴重な写真で、いまよみがえる！



御即位式記念 東京駅前ノ奉祝門（本書より）

## 日記に読む近代日本 全5巻

●昭和前期 土田宏成編  
昭和恐慌から戦争、そして敗戦……。激動の時代を描く。  
（第1回配本） 3045円

## 日本近世の歴史 全6巻

企画編集 藤田 覚・藤井譲治  
■天下人の時代  
藤井譲治著 信長・秀吉・家康ら「天下人」の時代に迫る。  
（第1回配本） 2940円

11月刊行開始！  
**明治時代史大辞典 全4巻**  
宮地正人・佐藤能丸・櫻井良樹編  
第1巻特別定価 27300円  
（2012年3月末まで）  
期限後定価 29400円  
2巻以降は予価各 29400円  
あらゆる分野の事項・人物約9500項目を詳細・正確に解説。  
**第1巻（あ～こ）**

吉川弘文館  
〒113-0033 東京文京区本郷7-2-8  
電話03-3813-9151 / 価格5%税込  
各種「内容案内」送呈

術研究それ自体やその成果を公表していくための仕組み、そしてまた学術的な業績を評価していくためのシステムのあり方に対しても甚大な影響を及ぼしていくものである。しかし、組織は、外部環境からの影響を被る存在であるとともに、他方では、環境の一部を取り込んで成長し、時にはみずから環境自体を変えていくものでもある。戦略領域としての組織ドメインは、そのような組織環境の変化を意図的に織り込んでいく時にこそ、文字通り「戦略」的な意義を持つものとなるであろう。

同様の点は、本を生み出すためのチームワークのあり方についても指摘できる。つまり、学術界と出版界は、さまざまな外部環境の変化に対して主体的・戦略的に対応していくことによってはじめて、本づくりにおける「制度の力」を再生し補強していくことができるのだと言えよう。

この点について考えていく上でどうしても忘れてはならない重要なポイントが一つある。それは、通常の企業の場合と学術出版社の場合とでは、戦略領域の再定義に関して大きな違いがある、という点である。

通常の企業の場合、戦略領域としてのドメインの再定義は、「われわれは、誰に対して、どのような商品・サービスを、どのような技術を用いて提供していくべきか」という問いに対する明確な答えを新たに構築した上で、それを組織の内外に提示していく作業として見ることができる。これに対して、学術出版社におけるドメインの再定義の場

合には、「われわれは、どのような価値を、実現するために、誰に対して、どのような商品・サービスを、どのような技術を用いて提供していくべきか」という問いに対する答えを示していくことが要求される。つまり、学術出版社の場合には、それに加えて、その事業の最終的な目的が問われることが多いのである。

言うまでもなく、最終的な組織目標ないし組織の「存在理由」は、学術出版社にとって、その組織アイデンティティの核を成すものである。われわれが、『本を生み出す力』において、学術出版社の組織アイデンティティにおける最も重要な構成要素の一つとして「文化」というものを想定し、またそれをもう一つの重要な構成要素である「商業」と対置されるものとして位置づけたのも、そのような理由があったからに他ならない。

学術書というものが「製品（商品）」と「作品」という二重の性格を持つように、学術出版社もまた、ほんらい、経営組織と文化事業体というハイブリッドな性格を持つものである。学術出版という営みが今後その危機を乗り越えて再生していけるかどうか、そしてまた、本を生み出す上での人の力・組織の力・制度の力をより強靱なものとして鍛えあげていけるどうかは、出版界の関係者だけでなく、著者や読者など学術界と何らかの関係を持つプレイヤーたちが、この、本と出版社が持つハイブリッドな性格を、学術コミュニケーション全体の仕組みの中にどのように位置

づけた上でチームワークを組んでいくにかかっているような気がしてならない。<sup>(5)</sup>

(1) 本の場合にも、謝辞などで、映画のエンド・クレジットに近いリストを見ることができるところがある。しかし、その種のリストはそれほど網羅的なものではないし、リストを挙げるのが制度化されているわけでもない。

(2) ここの議論の多くは、主として以下の文献を参考に行っている——Powell, Walter 1985 *Getting into Print* University of Chicago Press, pp.45-54. 榎原清則・大滝精一・沼上幹 1989 『事業創造のダイナミクス』白桃書房、および榎原清則 1992 『企業ドメインの戦略論』中公新書。

(3) 出版に関連するさまざまな企業の中でも、印刷関連企業——特に大手印刷会社の場合——は、かなり以前から、機能的定義を中心にしたドメインの再定義を大胆に推し進めているように思われる。

(4) 大学出版部の中には、大学組織の一部としての「顔」と出版社としての「顔」を兼ね備えるハイブリッドな組織であることによって、組織ドメインの再定義においてとりわけ複雑な問題を抱えている例も多いことだろう。

(5) 本づくりをめぐる「制度の力」は、出版界と学術界のあいだで、

## テクノロジーとイノベーション

進化／生成の理論

アーサー 技術革新はどこから生まれるのか？ 経済学の鬼才が豊富な具体例とともに精緻に理論化。有賀監修・日暮訳 ¥3885

## 戦後日本デザイン史

内田繁 最先端の現場を知るインテリア・デザイナーによる、ジャンルを超えた戦後デザインの壮大な通史。図版多数。¥3570

## 記憶を和解のために

第二世代に託されたホロコーストの遺産

ホフマン 繋ぐ存在として人類の負の遺産をいかに未来に伝えるか。ホロコースト第二世代の思索と展望。早川敦子訳 ¥4725

## トランスレーション・スタディーズ

佐藤＝ロスベアグ・ナナ編 他者をいかに翻訳するのか。歴史、世界文学、文化翻訳、法廷通訳まで、学際性の最前線。¥5040

## 盲目の女神

20世紀欧米戯曲拾遺

トラー、カイザー、オデッツ、インジ、アンドレーエフ、アラゴン、デスノス、ウィリアムズ。遺珠8篇を初訳。小笠原豊樹訳 ¥8190

## オットー・クレンペラー

あるユダヤ系ドイツ人の音楽家人生

ヴァイスヴァイラー 膨大な新資料に基づく伝記決定版。人生の陰翳を濃密に描く。鑑賞の手引にも最適。明石政紀訳 ¥4830

## 古代ローマ生活事典

ヴェーバー 衣食住に冠婚葬祭、レジャー、エネルギー、医療、教育……古代の日常を浮彫にする213項目。小竹澄栄訳 ¥21000

東京文京本郷 5丁目32-21 **みすず書房**

tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)  
http://www.msz.co.jp

学問のあり方や出版社および大学などの教育・研究機関の位置づけについて、一定の合意を形成していくことによってこそ、より堅固なものになると思われる。これは、とりもなおさず、個別の組織の枠を超えた、いわゆる「ドメイン・コンセンサス」を形成していくことに他ならない。

■特集・本を生みだす力

## 挑発Ⅱ媒介としての編集——學術書を生みだす力を考える

橘 宗吾 (名古屋大学出版会)

現在、グローバル化と連動したデジタル・ネットワーク化の進展によって、出版の役割が変わりつつあると言われる。私は予想屋ではなく、ここで将来予想をすることは控えたが、変化は確実にある一方で、変化が進めば進むほど、編集という役割の重要性、しかも素人ではなく頂上レベルの仕事の必要性に気づくことになるだろうと考えている。しかし編集については、実はその言葉ほどよく知られていないようである。そこでまず、本を生みだす編集の働きについて、多少とも整理して紹介するところから始めたい。

### たて・とり・つくり

紙の書籍の場合、書かれた言葉が紙に印刷・製本され、モノとしての書物が流通経路を通じて読者に届き、読まれることになる。このうち印刷・製本の部分は、印刷所と製

本所で行われ、出版社にとっては外注する部分にあたる。出版社の主たる役割は、むしろその前と後の部分、つまり、著者（書き手）に文章を書いてもらい印刷できる状態まで整えることと、書物の形になったものを販売していくことにあり、通常それぞれ編集部門と営業部門が担っている。

今は編集について述べているので、前の部分に注目すると、佐藤郁哉他著『本を生みだす力』でも紹介されているように、それはさらに「たて」「とり」「つくり」に大きく分けられる。出版企画をたてる、原稿をとる、書物をつくる、の三つである。これを企画化・原稿化・書物化と呼ぶこともできる。

このうち最も重要で編集者の腕が問われるのは「たて」と「とり」の過程である。ここで「たて」のみとしないのは、これが循環するプロセスだからである。編集者は著者に、ある構想のもとで本を書くよう依頼するとともに、実

際に書くことを促し、書かれたものを読み、読んだ結果をまた著者に投げ返して改善を求め、企画Ⅱ原稿をよりよいものにしながら本を実現していくわけである。

このプロセスの役割は、著者に対する側面と読者に対する側面に分けて考えることができる。まず著者に対する役割としては、著者を何らかの形で触発して、本を書くことと思ってもらわねばならないが、学術書の場合、このとき最も大事なものは、「学問のディシプリンを大切にしつつも、それを超え出るよう促す」ことである（私の出版の師匠である後藤郁夫氏はこれを「挑発する」と呼んでいた）。しかし、いったん執筆する気になっても著者はなかなか原稿を書いてくれない。これは原稿化する過程が、研究の体系化の過程でもあるために、時間がかかるからである。したがって、粘り強く「待つ」といつてもボンヤリしているわけではなく、時機を見て連絡をとり、時々会っては四方山話から本のプランの相談までです。このとき一番重要なのは、その著者の研究が最高の形で完成したものを読みた

いという気持ちを伝えつづけることである。そしてようやく著者が原稿を書いてくれば、次にそれを「読む」ことになる。もちろん、そもそも著者の方から出版企画の提案がなされたり、すでに書かれた原稿について相談を受けることもあるが、どの場合でも、最初に書かれた原稿がそのままでOKになることは稀であり、いわゆるボツになるケースも含め、読んで感じ考えたところを著者に差し戻すことになる。これも一種の「挑発」であると考えれば、ここから「挑発する」待つ「読む」という循環がふたたび始まるといえる。そして原稿が最終的に「よし」と思えるところまできたら、初めて「つくり」つまり書物化の段階に進んでいくわけである。「たて」と「とり」のプロセスには時間がかかることも多く、大きな学術書の場合、十年以上を要することもある。

では、この循環的なプロセスは、今度は読者に対してどのような役割を果たすのか。それは一言でいえば、生みだされた本の質を保証することである。本をプロデュース

## アイヌ口承文学の認識論

エッセイモロジ

歴史の方法としてのアイヌ散文説話

坂田美奈子Ⅱ著

五八〇円

口頭伝承社会のアイヌ散文説話をテキストとして、  
アイヌと人間関係史に  
オルタナティブな視野を提示する

- 序 歴史という課題、文学批評という方法  
1 アイヌ口頭伝承研究の「不在」  
2 アイヌ口承文学におけるテキスト生産  
3 アイヌの物語における社会矛盾の解決  
4 生存の単位としてのカムイ・アイヌ・シサム  
5 様々な漁場認識  
6 アイヌと側目見、二つの認識論  
終 アイヌ口承文学のエッセイモロジ

## 「貧困」の社会学

労働者階級の状態

鎌田とし子Ⅱ著

九〇三〇円

物質的困窮が生む  
非人間的な生活過程を  
知悉する著者の集大成

- 序 貧困研究の系譜  
1 社会諸階級・階層関係と「貧困階層」  
2 生活構造論と社会階層論  
3 貧困と家族崩壊  
4 「世帯単位主義」からの離陸  
5 労働力の価値分割と生活単位の個人化  
6 個人単位の生活と普遍的福祉社会

### 御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20  
電話03-5684-0751  
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

していく編集の働きのなかでも、クオリティの保証は学術書出版社にとって本質的な機能の一つであり、これを「知の門衛<sup>ゲート</sup>」ないしは「信頼性の保証」、さらに進んで「信頼性の創造」と呼ぶ人もいる。

### 読むこと、そして挑発Ⅱ媒介

こう説明してくると、編集者がすべてをコントロールしているようで、いささかエラそうに聞こえるかもしれない。しかし私は、編集の仕事の醍醐味は、ほんとうは、本を書くことを依頼した際の編集者の期待など軽々と超えてしまうような原稿を初めて読んだとき、その衝撃で自分自身が変わってしまう経験にあると思っている。そうした原稿を読むことは、一方で苦しい経験でもあり、読み進めようとしても、ひっかかって進まなくなったり、これでいいのかと不安になったり、考えるのをやめなくなったりすることもある。とにかく、自分のそれまでの物の見方・感じ方を変えてしまう、つまり自己変容をせまってくる部分があるため、これは実に容易ならざる経験なのであり、そうした場合には、他に計画中だった本を、少なくとも以前と同じようには作り続けることができなくなるほどである。しかし、これは決して悪いことではなく、むしろその衝撃の波を何らかの形で他の出版企画に投げかけていくことは編集者の重要な役割だと考える。つまり、これこそ、先ほど述べた「挑発」の、大きな原動力の一つになるわけである。

ところで、上で「体系化」という言葉も使ったが、学術書にとって体系性は中核をなすものである。これはより一般的には、書物のもつ「世界」と言い換えることもでき（『本を生みだす力』では「物語」と呼ばれている）、個々の論文ではなく書籍を作ること・読むことの重要性はここにあると言っても過言ではない。従来、紙の書物の中では、読むための機能と、検索するための機能が共存してきたが、現在、デジタル・ネットワーク化によって、検索機能が肥大化し突出する中で、読むことが、特に体系性ないし世界性を読むことが、衰弱しつつあるように見える。検索の驚くべき利便性は否定しようもないが、しかしそれは、読むことに取って代わることはできないという点が肝心である。さらにいえば、多くの人が検索情報の消費者、できれば情報の操作主体になりたがっており、読むことによる衝撃や、それによる変化を恐れているようにも見える。読むことは、なにか受け身で誰かに操作されることのように感じられ、負の価値を与えられているのであろう。しかし、読むことによる衝撃は、人間を変えうるものであり、決して軽んじてはならない。むしろ、不完全な情報の中で生きるしかない人間が創造的に生きようとするれば、読むことによる自己変容・自己変革は最重要のものの一つであり、この自己変革こそあらゆるイノベーションの根本をなすものである。

さて、先ほど編集者の役割として「挑発」ということを

# 東 信 堂

## 教育哲学

宇佐美寛  
四六・2520円

外国思想に寄生する偽りの「教育哲学」を排し教育における矛盾を自力で批判する真のあり方を提示。

## 国立大学法人の形成

大崎仁 市場原理と公共的責務の亀裂は超克されたか。四六・2730円

## あなたの未来を拓く 通信制大学院

日本大学大学院・宮本  
ゼミの12年のドキュメント

宮本晃 社会人に贈る新たな自己  
実現システムの全容。四六・1890円

—〈現代臨床政治学シリーズ⑦〉—

## ティーパーティー運動

現代米國政治分析

藤本一美・末次俊之 俄然注目を  
集める運動の全容。四六・2100円

—〈今日必須の国際私法最新研究〉—

## グローバル企業法

井原宏 A5・3990円

## 国際民事訴訟法・

## 国際私法論集

高桑昭 A5・予6825円

## 日本よ、浮上せよ!

21世紀を生き抜くための具体的戦略  
村上誠一郎(衆議院議員) + 21世紀  
戦略研究室 政治・社会・教育を貫  
く渾身の政策提言。四六・予1680円

## このままではいけない。

## 原子炉を「冷温密封」する! 【仮題】

村上誠一郎 + 原発対策国民会議  
隠れている真の危機。四六・予1680円

## ケースで学ぶ国際開発

山口しのぶ・毛利勝彦・国際開発高  
等教育機構編 関係者研修のため  
の実践的ケースブック。A5・2730円

## 国際法から世界を見る

市民のための国際法入門

〔第3版〕

松井芳郎 平易に解き明かすその  
真髄。待望の新第3版。A5・2940円

(価格は税込定価表示です)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-20-6

☎03-3818-5521 FAX03-3818-5514

http://www.toshindo-pub.com

述べ、その原動力の一つをあげたが、さらにあと二つ具体例をあげておきたい。

言うまでもなく、編集者は個々の学問分野に関しては専門家ではなく、非専門家である。しかし、非専門家であるということは、多くの分野に関わるといふことである。専門家は一つの分野のことはよく知っている存在だが、その専門を離れると近い分野のことでも驚くほど知らないことがある。ところが、非専門家である編集者の方は、複数の分野で本を作るため、多少とも様々な分野の事情を知りうる立場にあり、それを専門家の世界へとフィードバックすることができる。例えば、Aという分野で新たなおもしろい問題が出てきたときに、Bという分野でもそれと同様の問題を考えることはしばしばあり、それをB分野の著者に伝え、「挑発する」のである。これを専門分野の間の媒介者の役割といってもいいだろう。

もう一つあげるなら、安富歩・東京大学教授が、専門家とは盲点を共有する集団だと述べているが、そのような盲

点を少なくしてよりよい認識に到達するには、外部の社会からの声を吸収することが大切になる。しかし実際には、専門度の高い内容について、それは容易ではない。そこで安藤隆徳・名古屋大学教授は、専門性を理解する編集者との対話を、文系の学問における一種の「実験」として位置づけ、社会からの声を自らの学問に織り込むための方法として提えている。要するに、専門家にとって当然の前提となっている事柄には、一般の目から見て「おかしい」と思われることや、「それを論じるのなら、なぜこれを論じないのか」といったことがよくあるのだが、そうした疑問を——それが絶対に正しいということではなく、誤りの可能性も踏まえた上で、しかもある程度専門性を理解した上で——発すること。言い換えれば、専門家の盲点に、その外部たる社会からの声をさしむけ「挑発する」ことで、編集者は専門と社会の間の媒介者の役割も果たすわけである。以上、①新たな知の波動を、読むことによる自己変容を通して伝えること、②複数の専門の間を媒介すること、

③専門と社会の間を媒介すること、の三つを挑発<sup>11</sup>媒介の例としてあげたが、「挑発する」とは、あえて言えば、励ますことの逆説的な形であり、また、「媒介する」とは、裏返して見れば、隔てとなっている障害を取り除くことといえるだろう。そしてこの二つが合わさって、「デイシプリンを大切にしつつも、それを超え出るよう促<sup>12</sup>」していくのである。

### 新たなメディア環境の中で

ところで、昨今の電子書籍などをめぐる議論では、最高レベルのクオリティを実現すべきもの、つまり頂上を作る仕事と、広い裾野をなしつつ同好の士が行うものとが区別されていまいに思われる。というより、その区別をなくしてしまうのが「ネットの世界」であり、それで万事うまく行く、といったかなり粗雑な意見が流通している。しかし、少なくとも書籍の世界についていえば、そうした意見は多くの場合、すでに高い質をもって実現されたものが存在することを無意識のうちに前提しており、それが無くなってしまった世界を真剣には考えていない。この点をよく考えるなら、引き続き頂上を作る仕事が必要であることは明らかであり、それには能力も手間ヒマもかかる以上、当然のことながら経済的にも再生産されねばならない。プロとしての編集者の仕事求められる所以である。

このとき、新たな次元の知識を新たなメディア環境の助

けを借りて生みだすことをためらう必要はないが、しかしそのことは、これまでの知識を捨て去ることを意味しないのと同様に、これまでのメディアの否定を意味しない。そもそも新たなメディア環境といっても、従来のメディアと新来のメディアとが交差しつつ並行して存在する状態が続いているわけであり、もしそうした状態が終わるとしても、これまでのメディアによって実現されてきたよい部分・優れた要素は、新たなメディア環境の中でも保持し発展させていく必要がある。そのことをしっかりと考え実現していくことが、これまでのメディアに携わり新たなメディア環境の中でも生きていこうとする者の大きな使命であることは、何度でも確認しておかねばならないだろう。

\* 本稿は第5回友愛公共フォーラム「学びと学問のイノベーション」(二〇一一年三月六日、於青山学院女子短期大学)で報告した内容の一部をまとめなおしたものである。

## ■特集・本を生みだす力——アンケート

問——本を生みだす際（執筆・編集・デザイン・販売）の「力」は、何だと思えますか？

あるいは、あなたが日頃の活動のなかで大切にしていることは何ですか？

### 青木淳一

（横浜国立大学名誉教授、著書『「南西諸島」のササラタニ類』『タニにまつわる話』ほか）

#### 生みだす側こそ楽しもう

本というものは、それが作られる前からジャンルが決まっています、小説、エッセイ、解説書、学術書などなど、出版する側も執筆する側も絶えずそれを念頭に置いて、その線から外れないように本が作られていく。研究者のはしくれである私が書く本は、学術書、解説書、エッセイのどれかである。

しかし、あるとき編集者と飲みながら話しているうちに、この垣根を取っ払ってしまったらいけないだろうかと私が提案したら、「やってみましょう！」ということになった。そうして出来上がったのが『ホソカタムシの誘惑』『むし学』（ともに東海大学出版会）などの書物である。研究者の書くネタは調査・研究であるが、頭の中は四六時中学問的なことだけでいいのではなく、楽しいこともたくさん混じっている。たとえば、小笠原諸島で調査中に学術的に

大変面白い発見をした後、夕食に食べたウミガメの刺身のうまかったこと。普通は前者は論文に、後者はエッセイに書き分けるのであるが、これを私の本では一緒にしてしまったのである。研究者の心の中で一緒になっていることを無理に切り離すことはないではないか。

これらの本は学術書であり、解説書であり、同時にエッセイ的な部分もたっぷり入っている。その結果、支離滅裂な本が出来上がるが、書く方も読むほうもそのほうが絶対に楽しい。本の「力」とは、発想を自由に「楽しむ」ことから生まれるものだと思っている。

### 井土純子

（武蔵野美術大学出版局 営業主任）

#### クリエイティブな発想で

「大学出版部＝学術書」というイメージが強いが、弊社の場合は主なジャンルが「芸術」ということもあり、専門

書のみならず、アートの楽しさや有用性を普及すべく、デザインや装丁にこだわりながら広い読者層に対して出版を行ってきた。私の仕事は、生みだされた本と社会をつなぐことである。

より多くの読者に知ってもらおうと書店での販売方法を模索していた頃、立川市・オリオン書房ルミネ店の小宮健太郎さん（現パピルス店店长）に「ムサビとフェアがしたい」とありがたいお言葉をいただいた。打ち合わせを重ねながら、美大色を全面的に打ち出し、美大そのものに興味をもってもらおうと考え、『ムサビ日記』の監修者であり、本学職員の手羽イチロウ氏に協力を仰いだ。

手羽氏の提案のもと、在学生はもちろん、他大学の美大生にもお薦め本をあげてもらい、凝った手作りポップで紹介。日本画学科の学生が見事な筆捌きで大型看板を描き上げ、特製の招き猫も登場。また、ムサビの先生方の寄稿による「ブック・ガイド」を無料配布した。約一五平米のスペースは学園祭のような雰囲気となり、約九百冊（弊社刊百七十冊）とスケッチブックなどの本学オリジナルグッズが並んだ「あなたも美大生！ ムサビ体験入学フェア」は約一カ月間。マスコミにも取りあげられ、好評のうちに幕をおろした。

「ムサビらしい」と言われるような、これからもクリエイティブな発想で販売活動をしていくつもりだ。

## 上村和馬

（慶應義塾大学出版会 編集部・編集担当―渡辺靖著『ア  
フター・アメリカ』 奥田博子著『原爆の記憶』ほか）

### 他者への畏怖に導かれて

夏目漱石の『門』という本をよく読む。緊張感のある文体や、静謐な空間描写が好きなのだが、特に人間の関係の描き方が気に入っている。もう一冊、スタニスワフ・レムの『ソラリス』。タルコフスキーの映画も良いが、知性を持つソラリスの海の描写は、原作の方が素晴らしい。

両者に共通するのは、他なるものに対する根源的な畏怖の念だと思う。他なるものに畏れ慄きながらも、生きようとする人間がそこには描かれている。いかに時代が変わろうとも、人間の営みにおいて、他者への畏怖の念が無くなることはない。

社会に放り出された瞬間から僕らは、他者に怯えながらも、他者と関係を築こうとする。言葉によって。言葉の表現は無限に考えられるが、本という個物に綴じられ、永く読み継がれるような言葉には、ジャンルを問わず、その根底に、他なるものへの畏怖の念が必ずある、と思う。少なくとも僕は、編集者として、そのような言葉を書く書き手を探す。ジャンルは正直なところ、何であつても構わないが、特にいわゆる人文書において、その根底にこの感覚が微塵も感じられない書き手に僕は惹かれない。

そしてまた、言葉は人を殺しもするが、人を生かすこと

もできる。特に、3・11以降に必要なのは、そのような言葉だろう。さらにまた言葉は、誰かに読まれて初めて意味を持つ。その意味で、ボロボロに読み込まれ、使い込まれた古書の表情に安心するが、他者への畏怖の念がある言葉なら、本という媒体から解き放たれても、生き延びるだろうとも思う。

## 白井敬尚

(グラフィック・デザイナー。デザイン誌『アイデア』アートディレクター、『建築』ブックデザイン、ほか)

### もう一つの物語

書き手はもとより読み手の立場からしても、テキストは本来テキスト以外のなものでもなく、書体、サイズ、行間、組幅、余白など形に関する要素は、テキストの本質(内容)とは無関係のものだといえる。それどころか、場合によってはテキストを阻害するものとして受け止められもする。しかし実際には、本質とは無関係の二次的要素＝文字組版と支持体によってテキストは視覚化される。つまり、記述言語としてのテキストは、それ自体では存在し得ない、ということだ。

デザインを生業とする僕が、形について考えるのは当然のこと。形にすべきものはテキストのどこかしらに内包されており、それが何らかの形で反映されるべきだと思い実

践してきたつもりだ。だが、実際に自分がデザインをするときに、そのみについて考えているのか、と改めて問うてみると、どうもそれだけではないように思える。

例えば、書名・著者名・出版社名・要望などの基本情報が、データのみによって送られてきたとしよう。こうした基本情報はデザインにとっては必須の要素で、これなしに形を作ることはいらない。だが、それだけでデザインをとなると、ちょっと待てよ、ということになる。

編集者や著者は、どんな顔で打ち合わせをしていたらうか。企画書やゲラを机の上に出した時の何気ない所作や言い回し。打合せ後の別れ際の顔。そして電話での声色。

そうしたたあい無いことを思い出しながらラフスケッチを描く。テキストがテキストのみによって自立できないのと同様に、デザインもまたテキストそのものに直接に関わるものではない、なにものかによって成り立っているような気がするのだ。

知人の古書店主のエッセイに「書物(紙の器)はそれ自体が物語なのだ」とあった。

書物作りに関わる人たちと、知らず知らずのうちにもう一つの物語を一緒に紡いでいるのだとしたら、それはなんと素敵なことなのだろうと思う。

## 中川和夫

（ぶねうま舎（元岩波書店編集部。編集担当―高橋哲哉著「記憶のエチカ」坂口ふみ著「個」の誕生」ほか）

### 匂いを嗅ぐ

日本酒に等級の表示が廃されて久しい。銘柄ごとの値段の格差はかなりのものだが、それも定着しているようだ。その差は、飲んでみれば何とはなしにわかる。しかし、これを言葉にしようとするときわめて難しい。

原稿という名の、生きられた時間の堆積と向かい合うとき、いつも匂いを嗅ぐようにしていると思う。品定めするのでも、ましてランク分けをこととしているのでもない。自分もまた生きてきた時間を背後に置いて、感応できるものを、そして容易には言葉になつてくれない何かを探している、と言っているだろう。しかしこれは、あくまでも理想的なモデルに違いない。その活動の実態は、いわば表と裏の世界をせわしなく行き来するお小姓か、知的ブローカーといったところだ。

編集者は、どじょうでも金魚でもない。どんな意味でも専門家ではないし、単なる読者でもない。強いて言えば、ラバのような合子といったところか。このヌエのような存在を必要としたのは、ある特殊な文化環境なのだろうか。高度情報化社会は、名づけようのないものや表現の難しいリアリティを磨りつぶすかのように高速で回転している。ここはしかし、古い奴だと言われようと、たとえ何の

あてもなかりうと、「グッときた」ものの置き場を探して、行けるところまで行くしかない、と思っている。滅びの美学などというものは、軽薄な身の柄ではないのだが。

## 細谷雄一

（慶應義塾大学法学部教授。著書「倫理的な戦争」「外交」ほか）

### 物質としての本への愛

人間には生命がある。同じように本にも生命がある。著者や編集者など多くの人の手によって、この世に本が生まれてくる。そして幸か不幸か、人間よりも本のほうが長く生きる場合が多い。最近では短期滞在しかできない書店の書架から、あるいは薄暗く寂しい出版社の倉庫から、運良く永住先を見つけることの出来た本は、巨大な図書館という共同住居、あるいは居心地のよい購読者の書齋へと引越をすることになる。そして本は多くの場合に、その本の「創造主」である著者よりも長生きする。

私はとりあえず大学教員という立場にいるが、本当のところは本を書くということが人生の中心であればいいなど常々思っている。だから、最初に単著を刊行できたときの喜びは忘れられない。もちろん、それ以前に学会誌や大学紀要といった場で原稿を書いてきた。だが、単著となり、それが書店で並んでいるのを見ると、格段と大きな喜びを

感じる事が出来た。装丁のデザイン、手触り、質量感などを含めて、私にとっては物質としての本はとても大切な存在なのだ。

これから書籍のデジタル化が進み、私もそれを利用すると思うが、物質としての本もまた大切な存在だ。コンサートホールで聴く壮大なオーケストラや、ヨーロッパの壮麗な美術館で見る壁一面の大きな絵画の作品も、デジタルで再現できる部分は限られている。本もまた、デジタル化で再現できるものと、物質として本と、両方が必要なのだと思う。私が生きている間は、私自身はやはり手で触り、鞆に入れて持ち運べて、喫茶店で広げて読めるような物質としての本を大切にしたいと思っている。

## 吉田敏恵

(紀伊國屋書店和書仕入本部販売促進部。  
紀伊國屋書店新宿本店「じんぶんや」主宰)

### インスピレーションそのままに

魅力的な本に出逢うとすぐに、それがブックフェアやイベント企画につながれないかとイメージしてしまいます。素晴らしい本は数限りなく存在しますが、「売る」ための企画として成立するかどうかのタイミングと面白さ、プラスαを感じ取れるかどうか。それらを含めてアウトライインがイメージできたとき、立案に向けて突き動かされる

といった感じですが。そして周囲の賛同を得られれば、本を読んで感じたインスピレーションそのままに、実現に向けての一步を踏み出します。

どんな企画を考えるときでも「本を売る」、この一点だけはぶれることはありません。しかし、その他はむしろ流動的でコラボさせて頂く方によつては性格も内容も随分変わっていきます。例えば昨年より新たに開始した「じんぶん大賞二〇一〇——読者がえらぶ人文書ベストブック」。その年に刊行された人文書のうち、読者とともに特に優れた本を顕彰していくことを目的とし立ち上げた企画でしたが、最終的には、数百名規模の大賞受賞記念イベントやTBSラジオとのコラボフェアまで実現するに至りました。立ち上げ当初は勿論、そんなことまで想定しておらず、どちらとも企画途上で出逢った、作り手の方々とのセッションによつて生まれてきたものです。

「こちら」さえ小さくまとまらなければ、本が生み出すパワーは無限大に広がっていることを常々、実感させられている次第です。

■特集・本を生みだす力——書評 1

卓越性<sup>エクセレンス</sup>と威信<sup>プレステイジ</sup>

——『本を生みだす力』を読む——

箕輪成男

(大学出版部協会顧問・元東京大学出版会)

このたび佐藤郁哉氏ら三人の著者による『本を生みだす力——学術出版の組織アイデンティティ』が新曜社から出版された。構想すること十年、取材のインタビュに七年を費したという画期的作品である。

しかし本誌から依頼されて書評を引受けたものの五〇〇頁の大冊を読み進むにつれて引受けたことを後悔した。

本書は一体研究発表書なのか、教科書の概説書なのか、それともファスト新書版ブームに対抗して重厚長大な教養書を提示されたものなのか刊行の目的がはっきりしないのである。何回も書き直し苦悩したあげく、これは伝統的な学術書ではなく、発電・水利・治水・景観等いろいろな目的のこめられた多目的ダムのようなものと理解してやつと目が覚めた。必要に応じてその部分だけを読めばよいとの前提で出来ているのだろう。しかもインプット、アウトプットをしまく

ったこういう組立ての本が電子書籍時代の典型となることを暗示しているとも思われるのである。

さて本書で著者は先ず組織アイデンティティを取上げる。学術出版の組織アイデンティティとはその出版社がどのような本の出版を目的としているかというに尽きる。ひと口に学術書といってもその目的は多様である。一方対象とする学問領域の区分もまた限りなく多岐にわたる。学術出版社は自社がどの学問領域で誰を読者対象とするかについて明確な戦略なしには競争に勝てない。アイデンティティの堅持が必要である。

この場合組織アイデンティティは没価値的概念であり、社会学書が哲学書より上とか、教科書出版は研究書出版より下といったことは無論ない。

これに対して価値的判断を伴っているのが企画原稿の卓越性である。出版社の背負う威信はそうした判断の成功の結果にはかならない。

個々の出版企画はこうして没価値的な分類と価値的な優劣の判断の両面で採否が決められる。この場合判断の恣意性を防ぐため、例えば大学出版部では編集委員会と理事会という二段階の審議を経るのが通例である。編集委員会では企画の学問的卓越性が検討され、理事会では出版部長の提案について財政的チェックが行われる。

出版部のゲートキーピングにおける判断はこうして組織アイデンティティに依拠したシステムを通して行われるが、組

織アイデンティティは一方で著者に自制を要求することによって、それ自身がゲートキーピングの機能を果たすことが注目される。例えば東大出版会の場合、母体組織、東京大学の組織アイデンティティはいうまでもなく日本最高の大学という立場であり、その出版部として出版会自体もまたそれにふさわしい伝統の形成を目指してきたといえる。

大学のもつ威信はいうまでもなく教育業績と研究業績の卓越性からくる。教員の産み出した研究成果、すなわちすぐれた論文・書籍の多寡によって大学の研究面での威信が決まる。大学の威信はメンバーである教員各人の威信の合計であるから、教員一人一人は大学の威信を一層高め傷つけないよう日夜腐心している。それは自著の出版について目に見えはしないが自己規制の形で強力な作用を及ぼさずにはおかぬ。たとえば東大出版会の場合、教員たちは彼らの作品の卓越性が学界全体で最高レベルであらねばならぬとの自負と覚悟と誇りからくる自己規制の圧力を不文律として常に感じているのである。

組織アイデンティティがこのように企画提案を抑制する役割を時に果たすのに対し、著者が本書で取上げるもうひとつのアメリカジャーゴン、ポートフォリオは、企画推進の方を向いている。アイデンティティに合致したものの受け入れ戦略を考える積極性を役割としている。

こうして書籍刊行をとりまく人々と組織の及ぼす作用・反作用を概観した上で、筆者の率直な感想を述べるならば、佐

藤氏は編集者のゲートキーパー的役割を過大に評価しているのではと思われる。すべてに明確さを求めるアメリカでは、選定にかかわる企画担当編集者は出版部長と編集長、それに編集長代理程度の少人数である。ここではエディターとは編集者ではなく、編集長を意味する。

ハーバードに限らず有力な大学出版部には年間刊行点数の何倍もの原稿が黙っていても出版を求めて著者から送られてくるといふ状況下では、原稿入手の努力よりは原稿の審査に多くの力が使われる。そこでは前記企画担当編集者たちに高い学問的識見が要求されるのである。出版部長や編集長は学会の大会に参加して学問の動向について新しい状況の獲得に努めている。その際の彼らは自らの見識にもとづいて対等あるいはより優越的立場から学者・著者たちと語るのであってタテ・トリ・ツクリにあいまいに動員される日本の編集者にまま見られるような御用聞きではない。まさにゲートキーパーなのである。

日本の著者たちがそのあとがきにはしばしば編集者の名前を掲げ感謝を示すのは当然としても、彼らをゲートキーパーという名称で呼ぶことには抵抗がある。

こうした認識の差は、佐藤氏が学者の世界から異業種の出版の世界を見ているのと、筆者が出版の世界を知悉した元出版人の眼で身内の編集者を見ているのとの目線の違いなのかもしれない。

## 学術出版を論じるアイデンティティ

——『本を生みだす力』を読む——

柴野京子

(東京大学大学院人文社会系研究科)

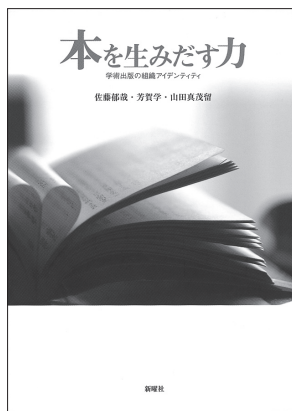
出版についての議論は難しい。同じパブリッシングでも、新聞のように論点となる基本的な目的が定まっていれば、あるいは構造が限られていれば、一貫した議論も可能かもしれない。しかし「出版」というくりはあまりに広く、多様である。たとえば「本」という言葉ひとつをとっても、本誌の読者が思い浮かべる「本」と、本誌の存在すら知らない人々にとつての「本」が同じである保証はどこにもない。

にもかかわらず、出版や書物という対象のフィールドは、語る立場の価値観によって、驚くほど単純に前提されてしまうことがある。しかも実際に語る人々は、関係者か本好きかのいずれかでしかない。すなわち出版を論じる困難は、事実の多様さに比べて、論じる立場と視点がいちじるしく偏っている、というアンバランスにひとつの要因があり、それらがあたかも同床異夢のように混在しているところに、さらなる要因がある。

その点からすれば、本書の立場は明快だ。学術出版物の著者であり読者であり、これを道具とする研究者のグループが学術出版社の状況に危機感を抱き、調査を開始する。問いもまた、いたってシンプルだ。学術図書の出版は、どのようなプロセスによって——誰の意思によって、またはいかなる関係性に基づいて——行われているのか？ この命題にしかるべき方法論で迫り、言語化することが本書の目的である。根底には、みずからの活動基盤である学術出版の構造を知らなさすぎたのではないか、という問題意識もある。

視点として用意されたのは、ゲートキーパーとしての編集者の役割、複合ポートフォリオ戦略、組織アイデンティティの三点である。その解説および、規模や背景の異なる四つの出版社へのインタビューを含む事例研究が、前半の第Ⅰ部、第Ⅱ部となる。続く第Ⅲ部では仮説の検証が行われ、第Ⅳ部では「ファスト新書」と名づけられる教養新書、欧米の学術出版事例から、日本の学術出版の構造分析が試みられる。

なかで興味深いのは、第Ⅱ部の事例研究である。本書でも指摘されているように、編集者など出版の当事者に関する言説は、それが本人ないしは同業者である「出版人によって」語られ、記されることで、何重にも物語化されることが少なくない。出版研究といわれるもののある種の限界でもあるが、いっぽうでは橋本求による『日本出版販売史』（講談社）、尾崎秀樹・宗武朝子による『日本の書店百年』（青英舎）など、意欲的なオーラル・ヒストリーの記録が、のちの研究に果た



佐藤郁哉・芳賀学・山田真茂留 著  
『本を生みだす力——学術出版の組織アイデンティティ』  
(新曜社、2011年)

した意義も大きい。本研究で行われた仕事は、その意図するしないにかかわらず、後者のような意味での資料価値をもつことになる。

ただし分析については、いくつか違和感があるものも否めない。編集者を「知のゲートキーパー」とみなすことについては、調査後に多義的な修正が加えられているものの、英雄譚としての編集者物語を上書きすることになってはいないか、という印象がある。また複合ポートフォリオについていえば、雑誌やコミックを含む日本の出版産業全体が、すでに巨大な複合ポートフォリオである。出版計画の違いは、それぞれの出版社の資金的な構造の差でもある。とりわけ専門書出版社の場合、特約店、常備寄託、教科書など新学期用の一括採用品に関わる支払いのような、刊行計画を規定する販売システムが複雑であり、製作には印刷や製本会社のキャパシティも関係する。時代的な検証も必要かもしれない。

しかしながら、こうしたいかにも「業界的な揚げ足とり」に終始するのはフェアではない。むしろ本書のポジションとして重要なのは、著者が研究者であるという観点からの展開可能性であろう。第IV部でとりあげられる、大学出版のアメリカ・モデルにみられる査読システムと「ファスト新書」が象徴する研究者の実績評価の実態は、大学および教育・研究の環境と学術出版の関係を示す中心テーマである。欧米の学術出版における極端なロングロマリット化や電子ジャーナルの問題はもちろんだが、そのほかにも教育・研究環境から参照できるポイントがある。たとえばハーバースト社の事例研究の中には、学術分野の細分化が出版マーケットを縮小しているという論点があるし、ブックオフや「自炊」による教科書の二次流通の問題を大学として論じれば、大学図書館の抱える課題にもリニアに接続してゆく。

そのような「大学当事者」としてのリアリティが、出版産業の実態とより多くの面で重ね合わされるならば、学術出版を対象とするコミュニケーションの回路はさらに開かれるだろう。出版という営みをめぐっては、研究者も編集者もアクターなのだ。その各々が、自分のリアリティに引き寄せながら相手のリアリティを理解すること——学術出版を論じるアイデンティティは、こうした往還のなかから紡がれてゆくほかにはないのであり、そのために投じられた労多い一石として、本書は受けとめられるべきだろう。

# ナチュラルヒストリーの時間

大学出版部協会編 A5判/160頁/定価1680円

## 自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーを愉しむ

### I. Prologue of Natural History

- 第1話 自然を記録すること……斎藤靖二  
第2話 自然史と本……青木淳一  
第3話 日本のナチュラルヒストリー……岩槻邦男  
コラム① 動物写真の世界

### II. History of Nature

- 第4話 ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司  
第5話 マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子  
第6話 京都の語り部：深泥池……竹門康弘  
第7話 遺跡の土に秘められた情報……松井 章  
コラム② ききみずきん  
第8話 遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀  
第9話 ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人  
第10話 日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

### III. Diversity of Nature

- 第11話 サクラソウとマルハナバチ……鷲谷いづみ  
第12話 日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和  
第13話 琉球列島の自然史……太田英利  
第14話 マンボウと標本……松浦啓一  
第15話 分類学事始め：タクソン、タイプ、名前……馬渡駿輔  
コラム③ サルにノミはいない？ 幻の定説

### IV. Story of Nature

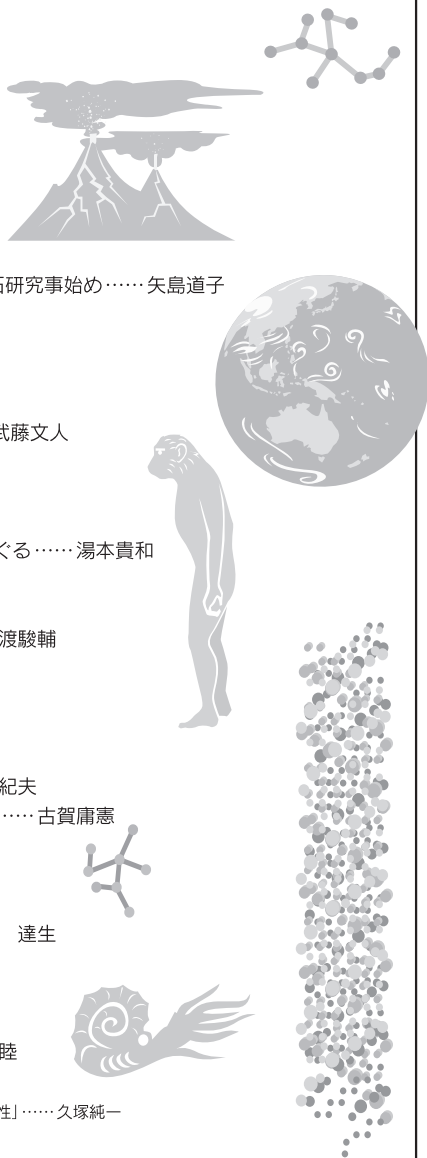
- 第16話 クマ大量出没の謎……大井 徹  
第17話 ふしぎの国のアリ巢……丸山宗利  
第18話 現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫  
第19話 子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲  
第20話 熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗  
第21話 殿様の自然史……松岡明子  
第22話 幻のロバと男たち……木村李花子  
第23話 食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周 達生

コラム④ アリジゴクの自然史

### V. Epilogue of Natural History

- 第24話 遺伝子を通じた動物との対話……村山美穂  
第25話 ゲノム時代のナチュラルヒストリー……西田 睦  
コラム⑤ 小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一  
自然史文献リスト



## 大学出版部ニュース

●二〇一一年度夏季研修会：二〇一一年度夏季研修会は八月二十五日(木)から二十七日(土)にかけて北海道大学で開催された。第一日は浦山毅氏他による直近に開催された「第一四回日・韓中合同セミナー」の再現講演が、二日目の午後には専修大出版局笹岡五郎氏と北海道大出版会の滝口倫子さんによるケーススタディが市内書店さんの参加を得て開催、活発な質疑応答が行なわれた。研修会の準備からご尽力頂いた北海道大出版会のスタッフ各位に改めて感謝したい。また来年度第一五回三ヶ国セミナーは日本開催となるが、七月の東京国際BF期間の開催が検討されている。●秋季各種セミナー：夏季研修会終了後、①事務局主催セミナー「大学出版部初期研修会」(九月二九～三〇)、②関西支部研修会「電子出版・学術情報の電子化の実践のために」(一〇月二六～二七)、③編集部会地方研修会「大学の情報発信と出版の連携―福岡からの提言(二月一八～一九)が連続開催される。協会活動の活性化を物語るものであり、それぞれ大いなる成果を期待したい。

## 北海道大学出版会

▼清水敏行著『韓国政治と市民社会―金大中・盧武鉉の10年』(A5判・六三〇〇円) 韓国の政治と市民社会の相互作用を明らかにする。(札幌学院大学選書)

▼鈴木敏正編著『排除型社会を超える生涯学習―日英韓の基礎構造分析』(A5判・六〇九〇円) 排除型社会を克服する生涯学習の現状と今後を展望。(北海道大学大学院教育学研究院研究叢書2)

▼遠藤乾・板橋拓己編著『複数のヨーロッパ―欧州統合史のフロンティア』(A5判・三三六〇円) 実証的・先端的研究を担う九人の著者により、統合史研究の地平を広げる試み。

▼呉人恵編『日本の危機言語―言語・方言の多様性と独自性』(A5判・三三六〇円) 日本の言語・方言の多様性とその変容、そして消滅の危機の現状を紹介・解説する。

▼山田伸一著『近代北海道とアイヌ民族―狩猟規制と土地問題』(A5判・七三〇〇円) 開拓使以降一九三〇年代に至る諸政策におけるアイヌ民族の位置づけとアイヌ民族への影響・彼らによる対応を資料に基づき精緻に分析する。

## 弘前大学出版会

▼『未利用バイオマスとしてのりんご剪定枝の活用戦略「増補改訂版」』泉谷眞実編著(A5判・一〇七頁・定価一〇〇〇円) 木質系バイオマスとしてのりんご剪定枝の有効利用は、青森県における資源の循環利用という観点からばかりでなく、大気中の二酸化炭素の削減という点からも積極的に取り組むべき課題と思われる。本書では、初版刊行後の研究成果を加え、剪定枝の堆肥化からリンゴ園に帰すという循環型農業の取り組み等、剪定枝の有効利用の可能性をさまざまな角度から模索している。

▼『臨床内分泌・代謝学 改訂第2版』須田俊宏編(B5判・五一五頁・定価五七七五円) 初版をベースに新しい疾患概念や診断、治療法の進歩を書き加えたほか、実際にどのように診断し治療したかという実例を加えるなど、大きく発展させた改訂版となっている。学生のみならず研修医も充分満足できるよう内容をより充実させており、内分泌・代謝学の分野の参考書として、実践的で必ず臨床の現場で役立つものとお勧めしたい一冊である。

## 東北大学出版会

▼東北大学生態適応GCOEチームPEM著『社会的責任学入門―環境危機時代に適応する7つの教養』（A5判・一六頁・一〇五〇円）

東北大学生態適応GCOE（環境激変への生態系適応に向けた教育研究拠点）に設けた人材育成プログラムPEM（Professional Ecosystem Manager）の資格取得を目指す大学院生が執筆者となり、「地球環境とSR」「生物多様性」「ソーシャルビジネス」「教育／メディア」などの7項目について論述。これからの個人・社会のあり方を問う一冊である。

▼城戸健一著・周立剛編訳『日中対照デジタル信号処理入門』（A5判・三一〇頁・三六七五円）

一九八五年に出版された同名の書物に中国語訳を付加し、対訳の形式で復刊。時間領域と周波数領域について論じ、波形を数列によって表してデジタル処理、Z変換、デジタルフィルタ、高速フーリエ変換（FFT）とその応用、さらに、フーリエ変換から離れて巡回型デジタルフィルタおよび音声分析の基本的方法である線形予測分析を解説する。

## 流通経済大学出版会

▼『私的交通システム論』生田保夫著（A5判・二八六頁・定価三六七五円）

移動行為は、人間社会の諸活動の基礎であるがゆえに、その本質、意義の理解が軽視されがちである。しかしながら、個別移動行為はあらゆる交通の基礎としてあり、その根幹をなしている。

交通は、人間個々の要求に応じた自身の私的交通に始まる。私的交通システムとは、個別主体の具体的諸活動を実体的に規定する交通過程を包括したものであり、一連の交通過程、ネットワークに深く浸透した交通関係を指している。そこに、交通主体の日常、社会活動の中心があることを考えれば、在るべき社会関係、そして、その持続性を育む環境との間に行われるダイナミックな有機的関係こそが、新たな社会パラダイム形成の鍵になっている。

本書の問題意識は、正に、そこにある。私的交通システムに焦点を当てて交通問題を論じようとするアプローチは、改めて原点に立ち返り人間社会の在り方を実体的に再検討し、持続可能な社会へと再構築する、交通学からの試みである。

## 聖学院大学出版会

▼聖学院大学カウンセリング研究センター『被災者と支援者のための心のケア』（A5判並製・一〇八頁・定価未定）

東日本大震災は、わたしたちからすべてのものを奪いました。直接被災した方々からは、かけがえのない命と健康を、生活の基盤であった家屋財産を、心のよりどころであったふるさとを奪いました。そして被災者、支援者を問わず、すべての人々から心の安定を、そして悲しみ苦しむ心に語りかけることを奪っていききました。

この冊子は、被災者と支援者の心のケアに役立つことをめざして書かれています。臨床心理士、精神科医、牧会カウンセラーなど専門家が書き、まとめました。しかしそれぞれの著者が、あまりに悲惨な現状に語りかける言葉を見出しえない、また言葉にならないもどかしさを感じながら書きました。著者たちのものがき苦しみの中から書いたことばが被災した方々、支援する方々の心のどこかに伝わることを願っています。街、建物、生活の営みの復旧、復興と共に心の復興が一日も早くなされることを願っています。

## 聖徳大学出版会

▼特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援―』（A5判・二〇〇頁・一六〇〇円）特別支援に関する医学・心理学面の専門的な知識と保育・教育指導の実務に携わるのに必要な内容を網羅する。

▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのかを音楽療法の第一人者がわかりやすく解説する。

▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなかから―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）医療現場での症例の紹介とその病氣と闘った人たちと著者との交流を描き人間的交流の必要性を強く訴えている。

▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱『親子で楽しむ唱歌集』（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」など文化庁「親子で歌いつごう日本の歌百選」にも選定された二三曲を含む全四二曲が収録されている。

## 麗澤大学出版会

▼安田喜憲編『対論 文明の原理を問う』（四六判・一六八〇円）地球と人類を滅亡から救うために、「生命文明の時代」に向かえ！二十一世紀に入って完全に行き詰まった物質エネルギー文明に代わる新たな文明原理の創造に向けて、各分野を代表する研究者（大島直行・町田宗鳳・大橋力・中谷巖）と環境考古学者・安田喜憲による強力対論集。

▼竹島明聡・竹島伊知郎著『僕は絶対あきらめない―車いすテニスに夢をかけた22歳の生と死―』（四六判・一六八〇円）骨肉腫（ガン）と闘いながら、自己の能力の限界に向かって挑戦することをやめなかった「未完の青春」の輝き！ガンの再発、度重なる手術にめげず、麗澤大学に入学、車いすテニス選手として活躍した著者が綴った、明朗、かつ哀切な闘病日記と日経新聞連載のコラムで構成。



## 慶應義塾大学出版会

▼ジョン・デイディオン著／池田年穂訳『悲しみにある者』（四六判・二五〇頁・一八九〇円）愛する者の死は、いざ訪れると、私たちが予期したようなものではなく、少しもない――。長年連れ添った夫、ジョン・ダンの突然の死。生死の淵を彷徨う一人娘、クインターナ。悲しみとは何か、結婚とは何か、家族とは、そして命とは何か。夫の死後一年間の心のたたかきを描き、他者の死を悼むことの意味を深く問いかける、全米大ベストセラー作品（二〇〇五年度全米図書賞受賞）。

▼ルー・バーナード他編／明星聖子、神崎正英監訳『人文学と電子編集―デジタル・アーカイブの理論と実践―』（A5判・五三六頁・五〇四〇円）デジタルの「本」の今後を導く電子テキスト編集のガイドラインを集約。「本」の未来を考えるすべての人に必携の書。

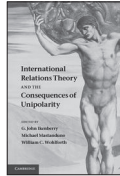
▼池田真朗著『ボワソナードとその民法』（A5判・四二四頁・六〇九〇円）明治近代立法黎明期の巨星ボワソナードの業績を分析し、民法（債権関係）の改正検討論議が高まっている現代において、その示唆を求める池田民法学の原点。

## ケンブリッジ大学出版局

### ► International Relations Theory and the Consequences of Unipolarity

(Paperback 9781107634596 USD 32.99)

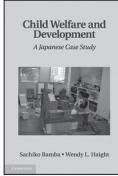
著名な国際関係学研究者のチームによる必携の一冊。現在の国家紛争や国際関係に関する理論はヨーロッパの十七・二十世紀の経験を経ていますが、一極化した二十一世紀の国際社会では、国家の行動に関して新しい視点を認めざるを得ません。本書は、勢力均衡、同盟、複合的相互依存など国際関係学の重要概念を根本的に見直す必要性があることを説いています。



### ► Child Welfare and Development, A Japanese Case Study.

(Hardback 9781107002845 USD 80.00)

本書は、日本における被虐待児と施設職員や学校教員の日常生活における経験や視点について、深い理解をもたらし一冊です。発達心理学、教育学、社会福祉学、児童福祉学の授業で国際的な内容を充実にするための資料を提供しています。



## 産業能率大学出版部

### ▼『成功確率を高める意思決定』安藤浩之著（A5判・二一〇〇円）ブラックボックスとなつている「意思決定」について、そのプロセスを紐解きながら、意思決定の成功確率を高めるための考え方やテクニックについてケースを使って解説。

▼『中国ビジネス超人門』平沢健一著（A5判・一六八〇円）長年中国の研究をしてきた著者が、これまで経験した「グローバルビジネス」と「中国ビジネス」をわかりやすく解説した入門書。

▼『経営戦略のフレームワークがわかる』井口嘉則・井原久光・日沖健共著（A5判・二一〇〇円）経営戦略を立案・実行する現場で「使う」ことに重点を置いた記述構成で、実務家が経営戦略策定の現場で広く活用できる50のフレームワークを使って解説。

▼『自分を高める仕事改善術』中田崇著（A5判・二一〇〇円）改善に取り組む時間を獲得する「タイムアロッドメント」「仕事の「見える化」、仕事で「困ること」の改善などの秘訣を着眼改善と改善案実施のコツを示しながら、ワークシートなどを交えてわかりやすく解説。

## 専修大学出版局

### ▼『読書と人生―刑法学者による百学百話』日高義博著（新書判・七三五円）

著者の専門家としての地下水脈を形作ってきたものに幅広い書物との付き合い合いがある。それを省察し、人生と読書との関係性を自己対話的に説く。専門の辺領域に踏み込み、ときに遊び、直感とイメージ豊かな随想の世界は限りなく広い。



### ▼『Teaching EFL Composition in Japan』上村妙子著（全英文・菊判・三五七〇円）

今日の英語教育は英会話に焦点が向けられ、英作文に関してはまだ不十分である。書く能力は自然に身につくものではなくそれなりの学習が必要である。本書は日本人学生がEFLのコンテキストを持つている中でその英作文の能力を構築するにあたり、いくつかの問題点を明確にし、彼らの能力を発展させるための解決法を提供する。

## 大正大学出版会

▼『教養のリメーカー―大学生のために―』司馬春英・星川啓慈編（新書判・七六〇円）本書は「自発的知的拡張能力」を重視し、学生が大学に入ってからある分野を専攻しようとするとき、それを自分で自発的に継続していくための核心／着眼点をズバリ指摘している。

▼『小児科医が語る子育て支援の実際』（TU選書8）中村敬著（四六判・一九九五円）子育て支援に長年取り組んできた小児科医が、子育て支援の現場にかかわる方々のためのアドバイスを平易に解説した実用書。

▼『近刊予定』

▼『天台仏教の教え』（TU選書9）多田孝文監修 最澄によって中国よりもたらされた天台大師智顗の天台思想は、比叡山を中心に展開された。その天台宗の歴史と教えを平易に論述する。

▼伊福部昭作曲『交響頌偈「釈迦」』楽譜と解説（CD付）。映画『ゴジラ』の音楽などで著名な作曲家伊福部昭氏の作品『交響頌偈「釈迦」』の自筆の楽譜を収録。片山杜秀氏の解説と初演のCDを付す。

## 玉川大学出版部

▼現代演劇協會監修『福田恆存対談・座談集 第二巻―現代の状況と知識人』（四六判・三一五〇円）竹内好を相手に「知識人」について議論する「現代の状況と知識人の責任」のほか、「文武両道と死の哲学」（三島由紀夫）など全十七編を収録。福田恆存がおもに昭和三十年代に語る、シリーズ第二巻。

▼有本編著『変貌する世界の大学教授職』（A5判・五二五〇円）十八か国のカーネギー大学教授職国際調査をもとに、変革の十五年を経て世界の大学教授がどのような変貌を遂げたのかを明らかにし、二十一世紀の日本の大学教授職像を展望。『大学教授職の国際比較』新版。

▼ピーター・D・ハーショック、マーク・メイソン、ジョン・N・ホーキンス編著／島川聖一郎、高橋貞雄、小原一仁監訳『転換期の教育改革―グローバル時代のリーダーシップ』（A5判・六五一〇円）グローバル化時代のアジア太平洋地域諸国の教育現状と課題を考察し、リーダーシップのあり方や、教育システムを変革するアイデアを提示する。教育のゴールに至る旅程を道案内するロードマップ。

## 中央大学出版部

▼古城利明著『帝国』と自治―リージョンの政治とローカルの政治』（三一五〇円）現代のグローバル化の下で多重的空間編成が展開されつつある。その中でリージョナルな政治とローカルな政治の意味と役割を、比較世界システム分析の視点から、「帝国」と自治という概念をキー・ワードに、イタリアと日本を主舞台に分析した挑戦作。

▼植野妙実子編著『フランス憲法と統治構造』（四二〇〇円）フランスの法と政治の基本を懇切丁寧に解説。フランスの意思決定システム、人権保障の具体的なあり方、フランス国内法とEU法との関係なども比較法的見地からわかりやすく説明した最適の概説書である。

▼岸真清・御船洋・黒田巖編著『高齢化社会における資産運用と金融システム』（四五・一五円）充実した高齢化社会にとって、資産の運用効率の向上と投資家を保護するブルードレンス規制の強化が不可欠である。本書は、信託、年金などの金融商品を具体的に取り上げながら、家計の視点から、望ましい金融システム、金融・財政政策のあり方を考察、提言する。

## 東京大学出版会

▼鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中  
子義勝編『矢内原忠雄』(二七三〇円)

東京大学教養学部創設六〇周年という節目に開催され、高い評価と支持を得た特別展示「矢内原忠雄と教養学部」と三回の連続シンポジウムをもとに、矢内原の生涯・学問・信仰・教育に光を当てその姿を立体的に描き出す一書。

戦後日本の知と心の再建を担った東大総長・矢内原の言葉が、没後五〇年を経たいま、混迷する日本の現在への警鐘として、曙光として、ふたたび甦る。

矢内原忠雄著『新装版 内村鑑三とともに』も新装復刊(四二〇〇円)

▼女性史総合研究会編『日本女性史研究文献目録 1968-2002 CD-ROM版』(二六二五〇円)

『日本女性史研究文献目録』既刊四冊(I~IV)のデータに加え、二〇〇二年までに刊行された文献リストを追加し計約二万四〇〇〇件の文献をデジタルデータ化、検索も便利にした必携の目録。二〇世紀の女性史研究の全体像を俯瞰し、さらには人文学の今後の展開を見通す確かな手掛かりを提供する。

## 東京電機大学出版局

▼高橋雄造著『電気の歴史―人と技術のものごと』(A5・二五六頁・三一五〇円) 電気器具の発明・発見史を軸として、古代から十九世紀末(電力技術の本格化の頃)までの歴史をほぼ網羅して述べている。技術の身をわかり易く解説し、社会にどのような影響を与えたのかをまとめた。貴重な資料も収録して、電気技術の特質を明らかにしている。

▼脇英世著『アマゾン・コムの野望―ジエフ・ペゾスの経営哲学』(四六・三二二〇頁・二三一〇円) いまや世界最大の書店となったアマゾン・コム。この書店はどのようにして誕生し成長してきたか、創立者のジエフ・ペゾスに焦点をあててその謎を解き明かす。虚飾や伝説が多い中で、株式上場の目論見書や証券取引委員会への年次報告書、裁判資料、特許資料など出典が確実な資料をもとに、ジエフ・ペゾスの生い立ちや思考過程などを時系列に沿って克明に追跡。電子ブック端末の先駆けとなったキンドルの開発を通して、アマゾン・コムの将来と電子書籍の今後を見通す、出版社・編集者・読者必携の一冊。

## 東京農業大学出版会

▼サイエンス小話『身近な物質から好奇心を育てる本』中西載慶著(平成二十三年四月・四六判・一五〇頁・税込価格一〇五〇円)

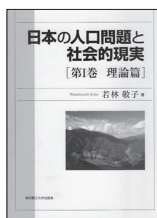
我々の身の周りに存在するたった一つの物質でも、それらを様々な視点からとらえることにより、科学のみならず、歴史や文化、生活や社会経済までのあらゆる分野の学びの素材となる。それらの中には、物質名ばかりが独り歩きして、その実態がほとんど知られていない物質や身近にありすぎて一般にはその性質が以外と知られていない物質なども無数に存在している。そこで、東京農大が発刊する月刊「新・実学ジャーナル」に、身近な物質シリーズとして、我々の身の周りに存在する物質を対象に、思いつくままにその紹介と解説を連載してきた。そのシリーズを整理し、いつでも、どこでも、気楽に読めるよう見開き二ページを一話となるよう編集。「学びの本質は好奇心にある。そして好奇心を掻き立てる事柄は身の周りに無限に広がっている」が著者の思い。特に若者の理科離れの歯止めとしてお勧めしたい一冊。

## 東京農工大学出版会

▼『日本の人口問題と社会的現実 第一巻理論編 第二巻モノグラフ篇』若林敬子著（A5判・第一巻・三六〇〇円 第二巻・三四〇〇円（本体価格））

本書は、今年退官する筆者が、四〇年間にわたって行ってきた日本農村社会学、地域人口社会学の視点からの研究・調査を集大成したものである。

第一巻の理論編は、人口・農村・開発・意識・教育にまたがる分野を①少子・超高齢・人口減少社会を突き進む日本の将来②地域開発と人口移動、理由③社会開発とコミュニティ論④人口資質と年齢構造―教育、人口、学校統廃合、一八歳人口の縮小と外国人人口、高齢女性論⑤農村における学習、意識、農村生活、家・家族の変化―などテーマ別にまとめている。また第二巻のモノグラフ篇では、農山漁村の九地域について人口減少と限界集落に焦点を当ててまとめている。そのドラスチックな人口変動に地域崩壊していく厳しい実態が見て取れる。



## 法政大学出版局

▼新城道彦著『天皇の韓国併合』（四二〇〇円）李王家はなぜつくられ、維持されたのか。朝鮮統治の安定と大義名分をかけて、その処理に苦慮した日本政府や官僚の状況を膨大な資料から読みとく。

▼B・クリック／関口正司監訳『シティズンシップ教育論』（三三六〇円）二〇〇二年以降イギリスで必修となった「シティズンシップ教育」の政策に影響を与えた政治哲学者の実践的思索をたどる。

▼J・ルカーチ／菅英輝訳『評伝ジョージ・ケナン』（三〇四五円）その回想録によってピューリッツァー賞を受賞し、外交官にして政治学者・歴史家であったケナンにアメリカの良心を見る。

▼前田和美著『落花生』（三一五〇円）植民地争奪や奴隷貿易により原産地の南米大陸から世界各地へ伝播した落花生。その五大産地の歴史、日本の先覚者の功績や食文化とのかわりを紹介する。

▼田辺悟著『イルカ』（三三六〇円）漁撈文化・食文化の長い伝統と保護運動の間に位置するイルカ。神話・伝説、信仰や漁撈伝承などを幅広く取材し、歴史と文化・民俗のなかの象徴的存在に迫る。

## 武蔵野大学出版会

▼『緑の水利権―制度派環境経済学からみた水政策改革』野田浩二著（二六二五円）

水資源を利用する権利も、地球環境の維持という視点でみた水政策の対象となる。米・オレゴン州と英国の水政策の事例を、資料やデータをもとに検討、水利権のグリーン化を考える。データも収録、月・季節・年単位の水政策の実態がみとれる。

▼『戦後米国の国際関係』浅川公紀著（三四六五円）ルーズベルトからオバマまで、第二次大戦後の米歴代十三人の大統領の外交施策を俯瞰する。数々の危機を経た米国と世界の六十五年。時の大統領の個性と歴代政権を貫く国家のアイデンティティのバランスは国際政治を考えるヒントとなる。

▼『わかる！伝わる！プレゼンカーレポ―ト発表も採用面接もこわくない』佐藤佳弘著（二七八五円）プレゼンテーションとは、自分を表現して相手に伝え、相手を動かすことである。日常生活のあらゆる場面はプレゼンから成り立っている。「プレゼンが人生を拓く」というゆえんである。初心者でも今すぐ実践可能なコツを具体的に伝授する。

## 武蔵野美術大学出版局

▼『みんなのアートワークショッププー子  
どもの造形からアートへ』小串里子著（A  
4判・一四四頁・三三六〇円）

本書で子どもたちの作品に出会う人は  
みな一様に歓声をあげる。粘土遊び、墨  
と絵の具の描画、布絵、アルミ線のオブ  
ジェ、色鮮やかに彩色された木片の造形  
物、布のコラージュ、版画等々。三歳から  
学齢前の五、六歳の保育園児が造形教室  
で作った作品は驚くほど色鮮やかで力強  
く自在奔放だ。一章から四章では、どこ  
にでもある素材を組み合わせ、子どもた  
ちが夢中になる造形物を企画するアイデ  
アとその制作法、指導法が開陳され、五  
章ではそれらの作品が越後妻有トリエン  
ナレのアートワークショップに参加し、  
子どもたちの作品による展覧会開催まで  
の過程が紹介される。六章は発達心理学  
に基づく子どもたちの描画の解説と、子  
どもと美術教育、アートの力、アートワ  
orkshopを論じる対談が収録されて  
いる。著者は美術教師として長いキャリ  
アを持ち、現代美術家でもある。万人の  
ためのアート、粹のない表現教育を提唱  
する著者のキャリアと信念を込めた一冊。

## 明星大学出版部

▼『教育委員会制度変容過程の政治力学  
と戦後初期教育委員会制度史の研究』  
樋口修資著

（A5判上製・二九八頁・三三六〇円）

占領下に制度化された教育委員会の意義  
と性格は独立回復後どのように変質した  
か。史料・国会記録等から丹念に考察。

▼『実業学校から見た近代日本の青年の  
進路』井澤直也著

（A5判上製・一七六頁・二六二五円）

工業、商業、農業（蚕業）の実業学校の  
教育課程と卒業生の就業の軌跡を追究。

▼『心の科学―基礎から学ぶ心理学』林  
洋一監修 本多明生・大原貴弘編集

（A5判・三三四頁・一九九五円）

専門的な知識を身に付け、人間について  
の理解を深めることを目的とした入門書。

▼『ここから始めよう 小学校英語―楽  
しい指導の第1歩』渡邊時夫・佐藤令  
子・粕谷恭子著

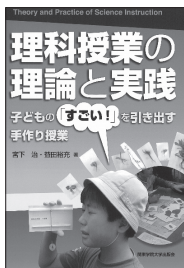
（B4判・一六四頁・一二二六〇円）

指導者のための英語教育法入門。長い実  
践から得られた授業のヒントがいっぱい。

▼『生徒指導―小学校―』味形修著  
（A5判・一六二頁・一三六五円）

## 関東学院大学出版会

▼宮下治・益田裕充著『理科授業の理論  
と実践―子どもの「すごい」を引き出す  
手作り授業』（一八九〇円）小学校や  
中学校の先生、そして先生をめざして学  
んでいる大学生を対象に理科大好きな子  
どもをはぐくむための理科授業の理論と  
実践について紹介する。



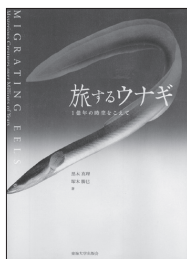
▼宮下治著『実践 理科教育法』（一八  
九〇円）先生の手作りの観察・実験を通  
して子どもが「すごい！」と言って理科  
が大好きになっていく授業の実践―六事  
例と理科授業方法のポイントを紹介。小  
学校の先生をめざす大学生と小学校の先  
生を対象としている。



## 東海大学出版会

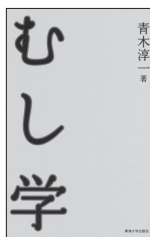
▼『旅するウナギー一億年の時空をこえて』黒木真理・塚本勝巳著（B5判・上製・二九二頁・定価三九九〇円）

不可思議だから面白い、ウナギの謎に包まれた生態に迫る。ウナギという生き物を自然科学にとどまらず、社会、人文といった多方面から科学し包括的に理解することを目的としたウナギ総記。



▼『むし学』青木淳一著（四六判・上製・二二六頁・定価二九四〇円）

虫好きのための「虫学」入門書。虫入門、虫の生態、人間と虫、昆虫採集、虫学者になるための心得、虫学者列伝、海外虫紀行の七つの話を軽妙洒脱に語る。



## 名古屋大学出版会

▼『原子力発電をどうするかー日本のエネルギー政策の再生に向けてー』橋川武郎著（二五二〇円）現実的シナリオとは何か。エネルギー産業史の第一人者による渾身の提言。緊急出版！

▼『朝鮮史研究入門』朝鮮史研究会編（四六二〇円）ダイナミックな発展を遂げる隣国、韓国・朝鮮の歴史を本格的に学ぶ人のための最良の道案内。

▼『法曹の倫理（第二版）』森際康友編（三九九〇円）ケースブックでは学べない、考え方の「なぜ」がわかる、好評の法曹倫理テキスト改訂第二版。

▼『法整備支援とは何か』鮎土京正訓著（五八八〇円）日本の法整備支援をリードしてきた著者による、新たな知的国際支援の創造に向けた希望のメッセージ。

▼『フラーレンとナノチューブの科学』篠原久典・齋藤弥八著（五〇四〇円）ナノスケールの炭素が生み出す多彩な姿を第一人者が平易に解説する。

▼『詳解テキスト 医療放射線法令』西澤邦秀編（四八三〇円）図表や写真を豊富に用いて直感的に把握。関連通知を含め、医療放射線法令の全体像を理解できる。

## 三重大学出版会

▼『反核都市の論理ー（ヒロシマ）という記憶の戦争』安藤裕子著（A5版・二〇〇頁・定価二一〇〇円）

序章 本書の目的・先行研究／第一章 アメリカにおける「ヒロシマ」・マスメディアが伝える「ヒロシマ」・世論調査に見る「ヒロシマ」・アメリカの教科書が教える「ヒロシマ」／第二章 広島が伝えてきたメッセージ・広島市長・被爆者団体・地元メディア・その他・広島の平和思想・基盤となるメッセージ・メッセージの深化と拡大・欧州反核活動と「ヒロシマ」・アジアから見た「ヒロシマ」・国際連合と「ヒロシマ」／第三章 「事例研究」スミソニアンが目指したものの・原爆投下五〇周年をどう記念するか・「歴史の岐路ー第二次世界大戦の終結、原爆そして冷戦の起源」・すれ違いの争点・退役軍人の反発・マスメディアの同調・政府議会からの圧力・歴史家、平和運動家による擁護・展示中止へ・スミソニアン論争が提起した課題／終章 「ヒロシマ」は二一世紀に何をどう伝えていくのか／あとがき／一次資料／参考文献

## 京都大学学術出版会

▼『卵子学』森 崇英 総編集（二九四〇円）これまでは、自由に大量に扱うことが出来ない卵子の性格上、エビデンスが少なく方法も未成熟だった卵子と胚の科学。最高の英知を結集し、この十数年の基礎・臨床研究の飛躍的發展を体系化した、生殖・発生生物学の国内外初の成書。研究者、臨床家、畜産学関係者必携。

▼『都市の水資源と地下水の未来』益田 晴恵 編（三六七五円）水資源として重要であるにもかかわらず、表層水とは異なり所有権が認められていない地下水。それだけに管理が難しく、汚染や枯渇、放置による水位上昇が引き起こす液状化や地盤脆弱化等の危機に見舞われ易い。大都市平野の地下水を可視化し、その公共財としての利用法を検討する。

▼『善の研究』の百年 藤田正勝 編（四四二〇円）明治四四年に刊行された西田幾多郎の『善の研究』は、日本の哲学が自立した歩みを始めた記念碑的労作である。二〇一一年に刊行百年を迎えるにあたり、この百年の『善の研究』をめぐる研究の歴史を振り返るとともに、今後どのような意義をもつ書物なのかを明らかにする。

## 大阪経済法科大学出版部

▼『未来を発信する八尾・環山楼市民塾2010』（環山楼市民塾運営実行委員会編・一五七五円）12月刊行予定。

環山楼は、江戸時代中期の八尾の豪商であった石田善右衛門利清が所有する建物の一部を私塾としたもので、儒学者である伊藤東涯に環山楼と命名されました。現代版環山楼市民塾は、民産学官からなる実行委員会を設置し、二〇〇八年一月から経済問題、法律問題、環境問題、まちづくり、情報化等の講座を開催してきました。

本書は今春刊行された『環山楼市民塾2009』の続刊になり、環山楼市民塾の二〇〇九年度の講演記録集である。

主要目次 第一章 激動する世界と日本経済の活路（本間正明）／第二章 今、求められるリーダー像（関 淳）／第三章 宇宙ビジネス―夢と現実―（河島信樹）／第四章 地域の環境政策を考える（坂田裕輔）／第五章 現代社会と企業の社会的責任―現代社会において、企業の最も重要な社会的責任は何か―（能塚正義）／第六章 東アジアにおける日本の道―過去から未来へ―（藤本和貴夫）

## 大阪大学出版会

▼志水宏吉・編『格差をこえる学校づくり―関西の挑戦』（二二〇〇円）「しんどう子どもを中心とする学級・学校づくり」という関西の伝統を踏まえ、新しい学校文化を力強く提言する。

▼米原謙、金鳳珍、區建英・著『東アジアのナショナリズムと近代―なぜ対立するのか』（三八八五円）近代東アジア百年の苦難の歴史を追い、今日に及ぶナショナリズムの根っこを確認する。

▼石田慎一郎・編『オルタナティブ・ジャスティス―新しい法と社会への批判的考察』（三七八〇円）裁判外紛争処理、修復的司法など、従来の法体系を越えた解決策を探る。

▼大竹久夫・編著『リン資源枯渇危機とはなにか―リンはいのちの元素』（一七八五円）地球規模で枯渇が問題になりつつあるリンを一〇〇％輸入に頼る日本は今、何をしなくてはならないか。

▼中村安秀、河森正人・編『グローバル人間学の世界』（二五二〇円）新設の「グローバル人間学科」が総力を結集して作る、人間開発学と地域研究に立脚した学際的な教科書。

## 関西大学出版部

▼土倉莞爾著『拒絶の投票―21世紀フランス選挙政治の光景―』（A5判・一九九五円）一九九九年EU議会選挙から二〇一一年フランス県議会選挙までの主なフランス選挙政治の光景を考察する。

▼井上泰山他共訳『中国文学史新著（増訂本）上巻』（B5判・五九八五円）これまでの中国文学史は、常にジャンルの盛衰を王朝の交替と連動させてきた。本書は、人間性の発展を基軸として文学の発展を跡づけた、画期的な中国文学史である。

▼水野一郎・永井良和編著『中国経済・企業の多元的展開と交流』（A5判・三九九〇円）二〇一〇年に開催された「第一回復旦大学・関西大学経済フォーラム」を中心に大阪万博を振り返りながら、上海万博とその後上海・大阪の経済交流を展望した研究書。

▼井上克人著『西田幾多郎と明治の精神』（四六判・三四六五円）哲学者の西田幾多郎には、明治の西欧近代化の流れにあっても朱子学的な倫理意識が根強くあった。彼の哲学的動機を、明治人特有の宋学的倫理観に求めた新たな試みについて考察する。

## 関西学院大学出版会

▼山路勝彦編著『日本の人類学―植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』（A5上製・七七六頁・定価七三五〇円）

▼吉田孝著『毫毛異ナル所ナシ―伊澤修二の音律論』（A5上製・二九四頁・定価四二〇〇円）

▼李政元著『ケアワーカーのQWLとその多様性―ギルド理論による実証的研究』（A5上製・二〇〇頁・定価三三六〇円）

▼石原俊彦・菊池明敏著『地方公営企業経営論―水道事業の統合と広域化』（A5並製・二二二頁・定価二二一〇円）

▼高橋広行著『カテゴリーの役割と構造―ブランドとライフスタイルをつなぐもの』（A5上製・二九八頁・定価二九四〇円）

▼Peter Smart・稲澤克祐著『Human resource management in the public sector』（A5並製・一七六頁・定価三一五〇円）

▼生駒幸子・森田雅也著『西宮のむかし話―児童文学から文学へ』（A5並製・二〇八頁・定価一八九〇円）

## 九州大学出版会

▼麻生太吉日記編纂委員会編『麻生太吉日記 第一巻』（A5判・一〇五〇〇円）明治後期から昭和初期の炭鉱経営の実態のみならず地方財閥の勃興の過程を余すところなく記した貴重な史料の刊行開始。登場する人名・地名・企業名など詳細な注釈を付し、また解説、地図、家系図、写真などの資料も収録する。全五巻、第二巻は二〇一二年刊行予定。

▼永池克明『国際企業経営の大転換―激動するグローバル経済と日本企業の挑戦―』（四六判・一八九〇円）低迷する先進国経済と躍進する新興国経済、FTAやTPPなど地域経済統合の進展。本書はグローバルリゼーションを所与として国際経営論・貿易論の観点からこれらの課題に対応するための日本企業の新戦略を提案する。

▼中内克昌訳『フラメンカ物語』（A5判・三九九〇円）中世オック語文学の『ロマン』として現存する、極めて貴重な作品を翻訳。嫉妬深い夫により塔に幽閉された美しき人妻フラメンカと、異国の若き騎士・ギヨームの愛の物語。

# 一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2011年10月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011	東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804	長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975	兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061	東京都中央区銀座4-7-5
岡本出版発送株式会社	〒353-0001	埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	〒100-0005	東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル7F
城島印刷株式会社	〒810-0012	福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009	京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス	〒102-0073	東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
株式会社桑川印刷	〒112-0012	東京都文京区大塚6-9-7
港北出版印刷株式会社	〒150-0002	東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065	東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013	東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工藝株式会社	〒101-0061	東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226	長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801	東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社	〒849-0902	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニツク株式会社	〒105-0012	東京都港区芝大門1-3-4 ダイニツクビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431	岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社洋尾	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-12-6
宗教法人天然寺	〒204-0021	東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061	東京都中央区銀座8-11-11
株式会社トーヨー企画	〒602-0923	京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066	東京都千代田区大手町1-3-7
萩原印刷株式会社	〒112-0004	東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322	東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 6F
株式会社平文社	〒170-0005	東京都豊島区南大塚2-35-7
ベル製本株式会社	〒112-0014	東京都文京区関口1-17-5
宗教法人法界寺	〒287-0003	千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒335-0034	埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051	東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012	大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒104-8243	東京都中央区銀座6-17-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042	東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031	東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

## ●広告掲載出版社一覧（掲載順）

岩波書店	〒101-8002	東京都千代田区一ツ橋2-5-5
未來社	〒112-0002	東京都文京区小石川3-7-2
吉川弘文館	〒113-0033	東京都文京区本郷7-2-8
みすず書房	〒113-0033	東京都文京区本郷5-32-21
御茶の水書房	〒113-0033	東京都文京区本郷5-30-20
東信堂	〒113-0023	東京都文京区向丘1-20-6

著作物二次利用許諾済み、ダウンロードしてすぐ使える  
【オンライン・データベースサービス】

## AFP World Academic Archive

社会、経済、歴史、地理、環境・・・幅広い年代とジャンルを網羅した 1000 万枚を超えるフォトストックと 60,000 点のニュース映像を、アカデミック価格でお届けします。



1835 年の設立以来、正確・中立・公正を守り続ける歴史と信頼の AFP 通信 (Agence France-Presse) が、厳密な倫理規定のもとで取材した写真と映像、さらに速報性の高いニュース記事を、日本国内の教育機関向けに提供するデータベースサービスです。

すべてのデジタル素材は、アカデミックユースでの著作物二次利用許諾済みです。書籍、教材、論文、授業や学会でのプレゼンテーションなどに、煩雑な著作権処理なしでご利用いただけます。

■ 資料請求、無料トライアルは AFPWAA ウェブサイトから

<http://www.afpwaa.com>

学校法人文化学園 アカデミックアーカイブセンター

〒151-8521 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Tel: 0120 - 021 - 311 info@afpwaa.com

一般社団法人  
大学出版部協会  
加盟出版部一覧

北海道大学出版会  
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目  
北海道大学構内  
TEL: 011-747-2308 FAX: 011-736-8605

弘前大学出版会  
〒036-8560 弘前市文京町1  
弘前大学附属図書館内  
TEL: 0172-39-3168 FAX: 0172-39-3171

東北大学出版会  
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1  
東北大学構内  
TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778

流通経済大学出版会  
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120  
TEL: 0297-64-0001 FAX: 0297-60-1165

聖学院大学出版会  
〒362-8585 上尾市戸崎1-1  
TEL: 048-725-9801 FAX: 048-725-0324

聖徳大学出版会  
〒271-8555 松戸市岩瀬550  
TEL: 047-365-1111 FAX: 047-363-1401

麗澤大学出版会  
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1  
TEL: 04-7173-3320 FAX: 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会  
〒108-8346 港区三田2-19-30  
TEL: 03-3451-3168 FAX: 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局  
〒140-0002 品川区東品川1-32-5  
TEL: 03-5479-7265 FAX: 03-5479-8277

産業能率大学出版部  
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12  
サビアタワー9階  
TEL: 03-6266-2400 FAX: 03-3211-1400

専修大学出版局  
〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2  
専修大学購買会別館2階  
TEL: 044-911-7179 FAX: 044-911-1382

大正大学出版会  
〒170-8470 豊島区西果鴨3-20-1  
TEL: 03-5394-3026 FAX: 03-5394-3038

玉川大学出版部  
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1  
TEL: 042-739-8935 FAX: 042-739-8940

中央大学出版部  
〒192-0393 八王子市市中野742-1  
TEL: 042-674-2351 FAX: 042-674-2354

東京大学出版会  
〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内  
TEL: 03-3811-8814 FAX: 03-3812-6958

東京電機大学出版局  
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2  
TEL: 03-5280-3433 FAX: 03-5280-3563

東京農業大学出版会  
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1  
TEL: 03-5477-2666 FAX: 03-5477-2747

東京農工大学出版会  
〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内  
TEL: 0423-67-6700 FAX: 0423-67-6700

法政大学出版局  
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7  
法政大学一口坂校舎内  
TEL: 03-5214-5540 FAX: 03-5214-5542

武蔵野大学出版会  
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内  
TEL: 042-468-3003 FAX: 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局  
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7  
TEL: 0422-23-0810 FAX: 0422-22-8309

明星大学出版部  
〒191-8506 日野市程久保2-1-1  
TEL: 042-591-9979 FAX: 042-593-0192

関東学院大学出版会  
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL: 045-786-7164 FAX: 045-786-9898

東海大学出版会  
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35  
東海大学同窓会館3階  
TEL: 0463-79-3921 FAX: 0463-69-5087

名古屋大学出版会  
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内  
TEL: 052-781-5027 FAX: 052-781-0697

三重大学出版会  
〒514-8507 津市栗真町屋町1577  
三重大学図書館3階  
TEL: 059-232-1356 FAX: 059-232-1356

京都大学学術出版会  
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69  
京大吉田南構内  
TEL: 075-761-6182 FAX: 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部  
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10  
TEL: 072-941-8211 FAX: 072-941-9979

大阪大学出版会  
〒565-0871 吹田市山田丘2-7  
大阪大学ウエストフロント  
TEL: 06-6877-1614 FAX: 06-6877-1617

関西大学出版部  
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35  
TEL: 06-6368-0238 FAX: 06-6389-5162

関西学院大学出版会  
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL: 0798-53-7002 FAX: 0798-53-9592

九州大学出版会  
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内  
TEL: 092-641-0515 FAX: 092-641-0172

大学出版88号(2011年秋)  
2011年11月1日発行  
頒価100円(〒共)

発行所:  
一般社団法人大学出版部協会  
ISSN 0913-3305  
振替00170-8-389131

〒102-0073  
東京都千代田区九段北  
1丁目14番13号  
メゾン萬六403号室

TEL: 03-3511-2091  
E-MAIL: mail@ajup-net.com  
URL: http://www.ajup-net.com/

—  
使用書体:  
リュウミン, R-KL, M-KL  
Ryobi Garamond, Book  
使用紙:  
紀州の色上質 特厚口 浅黄

—  
表紙デザイン:  
白井敬尚形成事務所